
スイート・スイーパー

やまじゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイート・スイーパー

【Nコード】

N1930X

【作者名】

やまじゆう

【あらすじ】

スイーパー（掃除人）が職業として、認知された時代の物語。

小さな商店街の片隅で、探偵業を営む冴えない貧乏青年・甘井総介あまいそうすけ。実は、凄腕の《国際公認スイーパー》であった。

幼馴染みの神崎三姉妹の協力を得て、今日も、明日も、明後日も、世の為、人の為、生活の為に奮闘するのであった…。

鉄組編く第一話

【第一話】

その日、娯楽の聖地・秋葉原は騒然としていた。

とあるメイドカフェで、爆薬を身体中に巻き付けた男が、店員を人質に立て籠もっているのである。

この店の常連客だった男が、その店員に恋をした事から全ては始まったのだ。

彼は、生まれてから女性とは全く縁の無かった自分に対し、いつも優しく接してくれる彼女が、好意を抱いているものだと思っていたのである。

そして、彼女を執拗に付け回した。所謂、ストーカー行為を働いたのだ。

悩んだ彼女は、警察に相談した。

当然、男は警察当局から厳重注意を受ける事となったが、その事が彼の凶暴な闘争本能に火を点けたのだ。

彼は、聖地・秋葉原の有りあらゆる《知識の泉》を駆使し、自作

の起爆装置と爆薬を自らの身体に巻き付け、お目当ての女性店員を人質にメイドカフェ店内に立て籠もったのだ。

半径二メートル圏内に於いては退避命令が敷かれ、その周囲を武装機動隊が固めている。

この現場の陣頭指揮を執るのは、若干二四才にして《警視庁広域犯罪対策本部本部長》の肩書きを持つ女傑、神崎菜里華警視である。

菜里華は、作戦指令車内で、ノートパソコンのモニターに向かって話し始めた。

「しゅうだけし剛田剛だな？ 私は、この現場の指揮を執る神崎だ。私の声は聞こえているな？」

菜里華のノートパソコンは、メイドカフェ店内のセキュリティシステムを通じて、スピーカーと監視カメラに繋がっている。

犯人・剛田は、目の前の監視カメラに視点を合わせた。

『う…うるさい！お前達警察が、僕達二人の仲を引き裂こうとしたから悪いんだぞ！』

剛田には、全く反省の色が見えない。それどころか、起爆スイッチをカメラの前でちらつかせ、挑発行為を楽しんでいる。

剛田が身体に巻き付けている爆薬は、人質を含め、半径一メートルを吹き飛ばす程の威力がある。

その所為か、剛田は警察よりも、自分の方が優位に立っているものと考えている様である。

理由はどうであれ、人質の人命を最優先に考慮した結果、警視庁上層部が下した決断は、犯人・剛田の《射殺命令》であった。

既に狙撃班は、犯人が立て籠もる店舗を中心に、四方から取り囲む様に配置付けされていた。

彼等、四人の狙撃手達は、サーモスコープを装着し、約三メートルの距離から黙々とライフル銃の狙いを定めている。

サーモスコープは、標的が壁等の死角に入った場合でも、その体温を感知し、確実に仕留める事を目的とした狙撃班特有の装備品である。

『各自、一発で仕留めよ！二発目は無いものと思え！』

無線を介した茉里華の言葉が、狙撃手達に緊張をもたらす。

茉里華の言う通り、一発で仕留め損なえば、犯人は躊躇う事無く、起爆スイッチを押すに違いない。

狙撃手達は、サーモスコープを凝視しながら、引き金を引くタイミングを見計らっている。

剛田は、人質の女性店員を右腕で抱え込み、左手に握り締めた起爆

スイッチをわざと見える様に、頭上に翳した。

その瞬間、一発目の特殊貫通弾が、壁を突き抜け、剛田のこめかみを僅かに掠った。

「…ッ!？」

剛田のこめかみから、一筋の赤い血が流れ落ちる。

更に、アルミ製の窓枠に接触した為に、弾道が逸れてしまった二発目は、カウンターテーブル上の花瓶を撃ち抜いた。

そして、三発目と四発目は、戸棚の中の皿とコーヒーカップを粉碎した。

狙撃は失敗したのだ…。

「お…お前等、ぼ…僕を殺そうとしたのか!? ふ…ふざけるな! みんな、死んじゃえええええ!!」

逆上した剛田は、茉里華が懸念した通り、起爆スイッチを握った左手親指に力を込めた。

『万事休す!』と、誰もが思ったその時、一筋の赤い閃光が、剛田の左手親指を一瞬にして蒸発させた!

そして、親指を失った左手から抜け落ちる起爆スイッチを更なる赤い閃光が撃ち抜いたのであった!

『武装機動隊、突撃せよ!』

茉里華の号令で、店舗脇に待機していた武装機動隊が、一斉に店内への突撃を敢行した。

剛田は、抵抗する間も無く、武装機動隊により、身柄を拘束されてしまった。

人質の女性店員は、無事に保護され、秋葉原を舞台にした人質籠城事件は、呆気なく終わりを告げたのである…。

茉里華は、作戦指令車から降りると、胸ポケットから携帯電話を取り出し、電話を掛けた。

「美里亜^{みりあ}、ご苦労だったな。総介^{そうすけ}に伝えてくれ。『お陰で、作戦は成功した』と」

茉里華は、僅かに笑みを漏らしながら電話を切ると、再び険しい表情へと戻った。

「皆、もう一頑張りだ。頼むぞ！」

・
・
・
・

時を同じくして、事件現場となったネットカフェから、東に一・五キロメートル程の所に立つ高層ビルの一室に、その二人はいた。

「…だそうですね、総介さん。良かったですねえ、茉莉華姉様に褒めて頂いて」

美里亜は、そう言って微笑みながら、携帯電話をハンドバッグの中に仕舞い込んだ。

「ははは…」

総介は苦笑した。

・
・
・
・

二〇〇〇年。世界は第五次世界大恐慌の煽りを受け、混沌の中に陥っていた。

各地では、テロ・誘拐・強盗・殺人・麻薬等の凶悪犯罪が横行し、民間人への被害が後を絶たない。

この事態を重く見た国連常任理事国の各首脳は、国連総会に於いて、国際法を一部改正し、《国際公認スイーパー》という新しい国際資格制度を設け、彼らに捜査権・逮捕権・死刑執行権を与えた。

所謂、《公認スイーパー》の誕生である。

彼等は、警察や司法機関とは完全に独立した立場の上に、《殺しのライセンス》を所有している為、自らの判断に於いて、凶悪犯罪者

への《死刑執行》が許されている。

更に、任務遂行上、やむを得ず、民間人に危害を与えてしまったとしても、罪に問われる事は無い。

つまり、《業務上過失致死傷罪》は免責とされるのだ。

少数の犠牲で多数を救えという概念からと言えよう。

それ故に、公認スイーパーの国際資格を取得するという事は、非常に困難を究めるのである。

彼、甘井総介あまいそうすけもまた、幾多の難関を乗り越え、国際資格を取得した《国際公認スイーパー》の一人である。

・
・
・
・

突然、美里亜が、何かを思い立たせた様に両手を叩いた。

「そうだわ、総介さん！今日は、先日のギャラが振り込まれている筈ですから、皆さんを呼んで、お祝いをしましょう！」

「何のお祝いですか？」

「勿論、総介さんの任務遂行祝いです！」

「僕のギャラで、僕のお祝いを…ですか？」

「はい！」

満面の笑顔で、美里亜が答えた。

ただ単に《飲む》口実を作りただけの美里亜の提案に対し、どうにも腑に落ちない様子の総介であった…。

・
・
・
・

その夜、近所の大衆居酒屋で、総介の《任務遂行祝い》が細々と行われた。

「それでは、総介さんの任務遂行を祝しまして、乾杯ーっ！」

美里亜の呼び掛けに、近所から商店街の仲間達が駆け付けた。

「皆さん、済みません。総介さんのギャラでは、こんな所でしか、ご馳走出来ませんので…」

「《こんな所》で悪かったな！チツ！」

居酒屋の店主が舌打ちをした。

「総介君、今度はどんな任務だったんだい？浮気調査かい？」

商店会長が、ほろ酔い気分で尋ねた。

「企業秘密です。ハハハ…」

この商店街で総介の業務は、《甘井調査事務所》として登録している。

つまり、一般的に言うところの《探偵事務所》である。

世間的に、《公認スイーパー》と言えば、『公的な殺し屋』というマイナスのイメージが多くを占めている。

確かに、公認スイーパーの周りには、血なまぐさい話が多い。

それ故に、《甘井調査事務所》は公認スイーパー・甘井総介の隠れ^{みの}蓑となっているのである。

しかし、最近では、本業よりも探偵業の方が、忙しい様である。

「総介君、肉屋の子猫が逃げ出して、困っているそうだ。捜してくれるかな？」

「は、はあ…」

その殆どが、ボランティアの様だが…。

「今日は、総ちゃんの奢り^{おし}だった？」

仕事帰りに立ち寄った美里亜の妹・聖理奈が、空いた席に着くなり、生ビールを注文した。

それに釣られて、他の連中も追加注文をし始めたのであった。

皆、人の奢りとあつてか、全く容赦がない。

「はああああ……」

総介は、大きな溜め息を吐いた。

『ゲコツゲコツ……』

不意に鳴り響いた蛙の鳴き声に、店内は一瞬にして静寂に包まれた。

美里亜は、徐にハンドバッグの中から携帯電話を取り出した。

それは、美里亜の趣味なのか、お世辞にも清楚な彼女に似つかわしいとは言えない着信音に、一同は失笑せざるを得なかった。

電話の相手は、茉里華である。

『美里亜、私だ。今日の飲み会には、出席出来そうもないのだが……』

「事件…ですか？」

『うむ、済まんな……』

「では、次回のお祝いの時には、是非、お来し下さい」

その時、電話のやり取りを聞いていた総介の表情が、曇った。

(この分だと、また、たかられますね…)

「美里姉、茉里姉は来られないの？」

多少、酔いが回った聖理奈が、頬を赤らめながら尋ねた。

「はい、お仕事ですから、仕方がありませんね」

茉里華の欠席連絡に、店内の連中は、意気消沈の様子だ。

この商店街にとっての神崎三姉妹は、看板姉妹とも言つべき名物の一つであるのだ。

以前、とあるタウン情報誌で紹介された事がきっかけで、口コミやインターネット等によって噂が広がり、商店街の潤いに一役買っているのである。

最近、彼女達の本業が忙しい所為か、なかなか三姉妹が揃うという訳にはいかなかった。

『他人の奢りおしで、美人三姉妹と飲む酒』を期待して来た商店街の連中だったが、世の中、そう思惑通りにはいかないものだと感じたに違いない。

「みんな、仕切り直すわよ！」

この沈んだ場の雰囲気盛り上げるべく、今度は聖理奈が、ジョッキを片手に立ち上がった。

「この《ひだまり商店街》の前途を祝して、乾杯ーっ！」

「聖理奈ちゃんの言う通りだ。さあ、飲み直しだ！」

商店街の連中に、再び笑顔が戻った。

ただ一人、いつの間にか、飲み会の趣旨が変わったにも拘らず、スポンサーの立場は変わらずの総介だけは、苦笑していた。

「ハハハ…」

かくして、《総介の任務遂行祝い》もとい、《ひだまり商店街の前途を祝う会》は、夜が明けるまで、盛大に続いた。

そして、総介のギャランティの殆どが、商店街の連中の腹の中に消えた事は言うまでもない。

国際公認スイーパー甘井総介。人呼んで、スイート・スイーパー。彼の前途は多難である…。

【第一話了】

鉄組編 第二話

【第二話】

とある街の小さな商店街。

ここは一年中日当たりが良く、暖かく、太陽の匂いがすることから、
《日だまり通り商店街》と呼ばれている。

その商店街の中に、一軒の小さな喫茶店が営業している。

《喫茶店ひだまり》。この店は、美里亜が一人で切り盛りをしている。

店の客の殆どが、美里亜達、神崎三姉妹目当ての男共だ。

イケ面からダサ男まで、商店街の看板姉妹・神崎三姉妹を一目見よ
うと、連日押し掛けている。

長女・茉里華は、警察官。次女・美里亜は、喫茶店オーナー。三女・
聖理奈は、弁護士。

それぞれ、職種は違えども、仲の良い姉妹である事には変わりなく、
時間が空くと、この喫茶店に顔を出す。

今日は、茉里華と聖理奈は、未だ姿を見せていない。

平日の昼下がりに、客の他愛のない話に耳を傾けながら、美里亜はコーヒーを淹れていた。

そんな中、奥の席で高級ブランドの背広を着こなした五十代風の男と、TシャツにGパン姿の若い男が、何やら密談中の様だ。

「初めまして。《甘井調査事務所》の甘井総介です」

総介は、あからさまな営業スマイルで名刺を差し出した。

男は、名刺と総介の顔を交互に見比べると、怪訝そうな顔つきへと変わった。

「な、何か…?」

総介は、ニコやかな表情をしながらも心配げに尋ねた。

「い…いや、私の顧問弁護士に、『腕が立つ探偵を紹介します!』と言われて来たんだが…」

(大丈夫だろうか?こんな弱そうな男で…)

今度は、男が総介に自分の名刺を差し出した。

男の名刺には、こう書かれてあった。

《弁天屋物産株式会社代表取締役社長・大徳寺虎ノ介》だいとくじらのすけ

弁天屋物産と言えば、国内でも五本の指に入る程の総合卸売問屋の重鎮的存在だ。

「そんな大企業の社長様が、こんな所に何用でしょうか？」

ガンツ…！

美里亜が総介の目の前に、思い切りお冷やを置いた。グラスの中の水は、半分以上こぼれ出ていた。

「《こんな所》で悪うございましたね！お客様、ご注文はお決まりですか！？」

満面の笑みを浮かべている美里亜だが、その背後からは、不吉な《魚》のオーラが立ち込めている。

（総介さん、折角のお客様なんですから、何かお飲み物をご馳走した方が宜しいのでは？）

美里亜が、気を利かせて総介に耳打ちをした。

総介は、メニューの中でも一番安いアメリカンコーヒー二八円を二つ頼んだ。

「はい！スーパー・デラックス・ロイヤル・ストレート・アメリカンコーヒー、二つ入ります！」

美里亜が、意気揚々とカウンター奥の厨房へ入って行った。

(はて…、スーパー・デラックス?)

総介は、メニューを見たが、そんな物はどこにも載っていない…いや、よく見ると、右下の方に小さな文字で何か書いてある。

総介は眼を凝らしたが、肉眼では読み取れない位の小さな文字だ。仕方なく、ウエストポーチからルーペを取り出し、メニューに翳^{かき}して見た。

その瞬間、総介の顔が青ざめた。

《スーパー・デラックス・ロイヤル・ストレート・アメリカンコーヒー三 円也》

「こ…これは、いったい何でしょうか？」

丁度良いタイミングで美里亜がスーパー…アメリカンコーヒーを持って来た。

《スプーンとカップと受け皿は純金製。コロンビア産の早摘み豆を一時間かけて煎り、オホーツク海の流水を溶かした蒸留水を使用。》と書かれた説明書きが添えてあった。

(何て贅沢なコーヒーでしょうか?これは、やられましたねえ…)

総介の笑顔は、引きつっていた。

「そ…それでは、本題に入りましょうか？」

総介は気を取り直し、話を進めた。虎ノ介も険しい表情に変わった。

「実は、恥ずかしい事なのだが…」

「様々な事情をお持ちのお客様が居ります。どうか、お気になさらないで下さい」

虎ノ介は、コーヒーを一口啜ると、大きく深呼吸をした。

「娘に…、涼音すずねに近付く男を全て排除してくれ！」

「は…？」

一瞬、店内が静まり返った。他の客も聞き耳を立てていたのだ。

「あの、それは一体どういう…」

「そのままの意味だ！あの子は可愛い！親の目から見ても、充分過ぎるほど可愛い！だからだ！あの子に寄り付こうとする悪い虫をくそむし尽く排除してくれ！」

虎ノ介はTシャツが伸びる程の力で総介の胸倉に掴み掛かった。

それにしても、何たる親バカっ振り…。周りのギャラリィは勿論のこと、総介までもが、そう思った。

調査とは関係のない、言わば、『娘の用心棒をしる!』という虎ノ介の依頼を総介が断ろうと、口を開けた時だった…。

「そのご依頼、お引き受け致します!」

何と美里亜が、総介の意に反して、この親バカの依頼を承諾してしまっただのだ。

「み…美里亜さん、ちょっと…」

総介が身乗り出すと、美里亜はお盆を総介の目の前にスツと差し出した。

お盆の上には、《請求書》と書かれた紙が一枚載っている。

総介はその紙を手に取り、開いて見た。すると、彼の笑顔は一瞬にして凍り付いた。

《請求書 甘井総介殿

家賃六カ月分

スパー・デラックス・ロイヤル・ストレート・アメリカンコーヒ
ー二杯分…》

総介は『ぐう』の音も出ない。

総介の事務所兼自宅は、『喫茶店ひだまり』の二階部分を幼馴染みの好^{よしみ}で、安く間借りしているのだ。

その所為か、総介は大家である美里亜には、全く頭が上がらないのであった。

「…では、契約書にサインをお願いしますね？」

いつ、何処から出したのか、お盆の上には契約書が載っていた。

美里亜はニコツと微笑んで、虎ノ介に契約書を手渡した。

虎ノ介もデレデレとしながら、契約書にサインをした。大したエロおやじだ。

ふと、美里亜が振り返ると、ギャラリーの男共は、いつの間にか二人のテーブルを取り囲んでいたのである。

「はいはい皆さ〜ん、お仕事の邪魔ですよ〜！」

美里亜は手を叩きながら、男共を追い払った。

虎ノ介は美里亜の顔をジーツと見つめた後、何か気が付いた様にポン！と手を叩いた。

「お嬢さん、誰かに似てると思ったら、ウチの弁護士先生にそっくりだ！」

それもそのはず。弁天屋物産の顧問弁護士は、神崎三姉妹の三女・聖理奈なのである。

聖理奈は、弱冠二三才で米国ハーバード大学を卒業。帰国後、司法試験を一発合格。その後、神崎グループの出資により、一五才にし

《ハッピー・ロー・カンパニー》
て法律事務所を立ち上げた。

五年経った現在は、数多くの企業を顧客に持ち、数百人の弁護士を束ねる大手法律事務所の代表を務めている。

因みに、《ハッピー・ロー・カンパニー》本社は、この《ひだまり商店会》に所属している。

「それでは、詳しい話をお聞かせ下さい」

何と、その噂のスーパー弁護士・神崎聖理奈が、いつの間にか同席して、話を進めているではないか！

「せ…聖理奈さん、いつの間に…？」

「たまたま通り掛かっただけよ。あ、美里姉、アイスコーヒーお願い！総ちゃんのツケでね！」

「は…い、ちょっと待っていて下さいねえ！」

美里亜は、満面の笑みでカウンターの奥へと入って行った。

総介の請求書に、新しく《アイスコーヒー》が追加された。

「何故、聖理奈さんのアイスコーヒー代を僕が支払うんですか？」

総介は異議を申し出た。

「当たり前じゃない！総ちゃんのことを大徳寺社長に紹介したのは私だよ！アイスコーヒーの一杯くらい良いじゃない！ねえ、社長お？」

虎ノ介もウンウンと頷く。

まあ、宣伝費と思えば安いものだと、総介は自らを納得させた。

「それでは社長、詳しい話をお聞かせ願いますか？」

聖理奈が仕切り直す。ビジネスモード全開だ。

「これが、私の娘…涼音だ」

虎ノ介は、上着の内ポケットから一枚の写真を取り出した。

その写真には、黒髪のショートで、瞳の大きな可愛らしい女の子が微笑んでいる姿が写っていた。

虎ノ介の遺伝子を受け継いでいるとは思えないほどの可愛らしさだ。恐らく、母親似に違いない。

虎ノ介は、依頼内容を説明した。

一六才の愛娘・涼音が最近、夜な夜な出歩いては朝帰りをするといい。

虎ノ介は涼音に問い質したが、仕事が忙しく、普段は親子の会話を

ら無い所為か、無視を決め込まれてしまったらしい。

仕方なくボディガードを付けたり、探偵に素行調査の依頼をしたが、何故か二日と保たずに断られてしまったのだという。

虎ノ介は悩んだ末、顧問弁護士である聖理奈に相談した所、腕の立つ名探偵・総介を紹介されたという経緯だ。いきさつ

「君には《涼音が夜、外出する理由》と《娘に群がる悪い虫の排除》の二点を依頼したい！」

これが、虎ノ介の依頼内容だった。

「そのご依頼、アフターケアも含めてお引き受け致します！」

「ア、アフターケアって…何ですか？」

不安げな総介に、聖理奈が耳打ちをした。

（決まってるでしょう！湯いた親子の絆を回復させるのよ！スイーパーだったら、最後はきれいに終わらせなさいね！）

（それは、無茶ですよ…）

総介の意思を全く無視して、聖理奈は虎ノ介との契約を結んでしまった。恐るべし、神崎姉妹。

「あらあら、これからが大変ですねえ、総介さん？」

美里亜は人ごとの様にニコニコしながら、コーヒーのお代わりを持って来たのであった。

【第二話了】

鉄組編〜第三話

【第三話】

調査開始一日目。

総介はまず、大徳寺涼音の行動パターンを探ることにした。

涼音が通う《聖グレゴリウス女学院》は、日本でも有数の《お嬢様学院》として知られるミッション系スクールである。

母体は、イタリア・ローマに本拠地を置く《聖ベネディクト女子修道会》だが、校舎がイタリア政府の管轄敷地内にある為、治外法権が認められている。

従って、イタリア国民と学院関係者以外は、基本的に立ち入り禁止となっている。

現在、涼音はその学院の高等部一年に在籍している。

七時 分。起床。涼音は意外と寝起きが良く、朝の支度をテキパキと熟こなす。

八時 分。自宅を出発。当然、運転手付きの高級外車での登校だ。

八時二分。学院到着。お嬢様学校だけあって、送迎車専用の駐車場も完備されている。

朝礼後、九時 分。授業開始。涼音はクラブ等には在籍していないので、一五時三分には下校となる。

下校の際には、やはり運転手付きの高級外車で一六時 分には帰宅する。

そして夕食を摂り、二二時 分。就寝。

これが、涼音の一日の行動パターンだ。

涼音の一日を追っていた総介が、ある事に気が付いた。

虎ノ介から受け取った涼音の顔写真には、可愛らしい笑顔の涼音が写っていたのだが、今日の涼音は表情が暗く、周りの者を敵視している様にさえ伺えるのだ。

二二時二分。大徳寺邸を見張っていた総介が、裏門から外出する人影を見つけた。

大きめのトートバッグを肩に掛け、自転車を漕いで行く涼音の姿だ。

総介も美里亜から借りたママチャリに乗って、涼音の後を追った。

「君、ちょっと待ちなさい！」

総介は、不意に顔面を懐中電灯で照らされた。

「ここで何をしてるんだ？」

総介の前には二人の警察官が立ち塞いでいる。

「どうやら、近所の住民から、『大徳寺邸の周りをうろつく不審者がいる』との通報があった様だ。」

警察官の一人が自転車を調べていると、登録証の名義が美里亜の名である事に気が付いた。

「この自転車、どうしたの？アンタのじゃないよね!？」

警察官は完全に総介を疑っている。

他人名義の自転車で、他人の家の周りをうろついている男を怪しまない訳がない。

総介は仕方なく、国際公認スイーパーのライセンスを提示した。

警察官は念の為、PEP-T（警察官専用携帯端末）で、総介の身分を照会してみた。

「…うん、間違いないね」

警察官の言葉に、ホッと胸を撫で下ろす総介であった。

「でもアンタ、とても公認スイーパーには見えないなあ。頼りないっていうか、ヘラヘラしてるっていうか…」

言いにくい事をはつきり言う警察官だ。

「ははは…、よく言われます」

涼音を見失い、今夜は調査どころではなくなった。総介は調査を明日へ持ち越す事にした。

・
・
・
・

調査二日目。

総介は、学院から帰宅後の涼音を張り込むことにした。

実は、出掛けに美里亜が、『張り込みも大変でしょう？』と、手作りの弁当を持たせてくれたのだ。

総介は、美里亜の優しさに胸を熱くさせながら、ステンレス製の弁当箱を開けた。

「…何ですか、これは？」

中には《あんばん》が、でんっ！と一個だけ入っていた。

そして、蓋の裏には何やらメモが張り付いている。

『張り込みと言えば、やっぱり、あんばんですよねえ。』

「……………」

総介は、あんばんを噛み締めながら、じっくりと味わった。

しかし、この弁当箱。あんばんが一個だけ入っていた割りには、デカくて重い。

よく見ると、弁当箱は上げ底となっていた。

底蓋を取ると、何と拳銃が入っているではないか！

そして、メモが……。『護身用です。持っていて下さいね。』

これも、美里亜の優しさなのだろうか？

二二時二分。涼音は昨夜と同じ様に大きなトートバッグを肩に掛け、自転車を漕いで出て行った。

総介も、周りに注意を払いながら、涼音の後を追った…。

・
・
・
・

涼音は、駅前の駐輪場に自転車を止めると、足早に駅構内の女子トイレへ入って行った。

総介は、女子トイレの出入り口が見える所で、涼音が出て来るのを待った。

一分経過。涼音は未だ中だ。

二分経過。人の出入りは多いが、涼音は未だ出て来ない。

三分経過。女子トイレの方をチラチラと見ている総介に対し、周りが不信感を募らせ始めたその時…。

金髪のツインテールに黒のひらひら衣装を着た少女が、女子トイレから颯爽と現れた。

(変ですねえ…、あんな娘が入った覚えはありませんが…)

総介は、背格好からして、あのゴスロリ娘が変装した涼音であると確信した。

総介は、夜の繁華街に消えて行く涼音の後を追った。

・
・
・
・

涼音は目的地がある訳でもなく、夜の駅前通りをただ歩き回ってい

るだけだった。

途中、擦れ違ふ若い男達に声を掛けられていたが、相槌を打つだけで、ひたすら歩き続けていた。

（彼女は、誰かを探しているのでしょうか？）

総介は涼音が周りをキョロキョロと見渡しながら歩き続けている事が気になった。

「おいアンタ、キャサリンに何の用だ!？」

突然、総介は背後から肩を掴まれた。

総介は、いつの間にか、一人程のヤンキー達に取り囲まれていたのだ。

しかも、ヤンキー達は金属バットやら鉄パイプやら物騒な武器まで持っている。

「キャサリン…ですか?」

ヤンキー達の後ろには、キャサ…もとい、涼音がこちらを見つめて立っていた。

「懲りないなあ、アンタ等も。キャサリンを付け狙う奴は、俺達が徹底的に排除するって言ったたる!」

(なるほどねえ…)

ゴスロリ娘に変装した涼音は、この辺では《キャサリン》と呼ばれており、父親が雇ったボディガードや探偵達は、この取り巻き達によって袋叩きに遭っていたのだろう。

(これじゃあ、二日と保ちませんよねえ…)

「困りましたねえ。ここは何とか、話し合いで…」

「済まねーよ！」

いきなり一人のヤンキーが鉄パイプで殴り掛かって来た！

総介は、鉄パイプをヒョイと避け、ヤンキーの足を引っ掛けて転ばせた。

それを見た他の連中は、総介目掛けて一斉に殴りかかって来た！

総介は、ブンブンと振り回される金属バットや鉄パイプを巧みにかわ躲しながら、相手の懐に入り、みそおち鳩尾に向かって打ち込む！打ち込む！打ち込んだ！！！

僅か、二分足らずの出来事だった…。

地面には、約一人のヤンキー達が腹を押さえながら、のたうち回っている。

「大丈夫ですよ。手加減していますから」

総介は呆然と立ち竦すくんでいるキャサリン…いや、涼音にゆっくりと近付いた。

「コラ、何してる!？」

聞き覚えのある声だ。

総介が声のする方へ振り向こうとした時だった…。

バチバチバチ…!

何と、涼音は総介の下腹部にスタンガンを当て、五万ボルトの電圧を放ったのだ!

「がっ…!？」

総介は足下から崩れ落ちる様に倒れた。

「助けて下さい!この人、ストーカーなんです!」

そう言うと涼音は、その場から走り去って行った。

後から二人の警察官が近付いて来て、地面に蹲すくまっている総介の顔に懐中電灯を当てた。

「またアンタか…?」

昨夜の警察官だ。

通行人から喧嘩の通報を受けて、駆け付けたのだという。

警察官は周りの状況を見渡した後、深い溜め息をついた。

「はあ…、喧嘩にストーカー行為か…。さすがに今回は、見逃す事が出来ないよ！」

総介は、今回ばかりはと諦めかけた…。

「悪いが、その男への手出しは無用だ！」

高級ブランドのスーツをビシッと着こなし、モデル並みのスタイルを持つ美女が、野次馬を掻き分けて近付いて来る。

「警視庁広域犯罪対策本部の神崎警視だ。彼は、我々が極秘捜査を依頼している人物だ。速やかに身柄を引き渡して欲しい！」

もちろん《極秘捜査》というのは嘘である。

彼女が提示した身分証には、確かに《神崎茉莉華警視》と記載されている。

「これは警視殿、御苦労様です」

警察官は素直に総介を引き渡すと、倒れ込んでいるヤンキー達を集めて最寄りの交番へ連行した。

茉里華は、神崎三姉妹の長女であり、次期神崎家当主となる人物だ。

英国ケン○リッジ大学卒業後、スコットランドヤードことロンドン警視庁への二年間に渡る捜査研修を経て帰国後、新たに設置された《警視庁広域犯罪対策本部》の初代本部長に就任した程の女傑だ。

「…それで、お前は何をしている？」

「よ…夜遊び娘の…素行調査を…。はは…」

総介は未だ下半身が痺れて、身動きを取る事が出来ないのだ。

・
・
・
・

《喫茶店ひだまり》脇の駐車スペースには、茉里華の愛車、黒いフェ○ーリが止まっている。

「まったく…。人だかりが出来て、何かと思って見に行くと、まさか、お前が警官に確保され掛かっていたとはな！」

「茉里華さんのお陰で助かりました」

時計は既に、夜中の二時を回っていた。

茉里華はまともに動けない総介を車に乗せ、《喫茶店ひだまり》まで連れて来たのだ。

「全く、お前という男は…、私達に恥をかかせるな！」

茉里華は以前から、事ある毎に、総介の尻拭いをして来たのである。その為、茉里華にとって総介は、トラブルメーカーとも言える存在であるのだ。

「大丈夫ですよ、茉里華姉様。総介さんには、いつも色々な意味で助かっていますから。あ、どうぞ召し上がって下さい！」

美里亜が厨房から、焼きたてのピザを運んで来た。

「そうだよ茉里姉。総ちゃんだって、頑張ってるんだよ！」

なぜか、聖理奈までいる。しかも、ちゃっかりピザをつまんでいる。

「お前達がそうやって甘やかすから、コイツはいつまで経っても、うだつが上がらないのだぞ！」

「ははは…」

「ヘラヘラするな！シャキッとしろ、シャキッと！」

茉里華が喝を入れる。

「《元デリーター》が聞いて呆れる…」

「…」

茉里華の何気ない一言に、美里亜と聖理奈は反応した。

「デリ…、何でしょうか？」

「茉里姉、^{デリーター}今つて言ったよね？何の事！？」

「い、いや…、何でもない。今担当している事件のキーワードの一つだ。失言だった。気にするな…」

茉里華は何とか誤魔化したつもりだが、二人は怪訝な表情を浮かべている。

二人は総介に顔を向けたが、『何の事がさっぱり』というゼスチャ―で返されてしまった。

「とにかく二人共！総介をあまり甘やかすな。本人の為にならんからな！」

茉里華はそれだけ言うと、足早に店を出た。

（あの子達に、総介の過去を知られてはいけない。もし、知られてしまったら…）

（総介の居場所がなくなってしまう…）

【第二話〜】

鉄組編 第四話

【第四話】

調査三日目。

ある日の早朝、虎ノ介の秘書から総介宛てに、昼一番で大徳寺邸へ来る様にとの連絡が入った。

総介は、美里亜から借りた自転車に乗り、大徳寺邸へ向かった。

大徳寺邸へ着いた総介は、屋敷の裏門へ回り、インターホンを押した。

「甘井調査事務所の甘井ですが…」

「はい。少々お待ち下さい」

若い女性の声だ。

すぐにメイドが勝手口から現れ、門扉に近付いて来た。

「ジーンツ…」

メイドは門外に立つ、不審な男を観察している。

「し、少々お待ち下さい…」

メイドは、総介の様子をチラチラと伺いながら、屋敷の中へ入って行く。

(…もしかして、不審者などと疑われているのでしょうか?)

確かに、大企業の社長宅には、ヨレヨレのTシャツにGパン姿の総介は場違いである。

(ギャラが入ったら、新しい服でも買いたましようか…)

暫くすると、先程のメイドが息を切らせて走って来た。

「大変申し訳御座いません！中へ、お入り下さい！主が、お待ち兼ねで御座います！」

メイドは深々と頭を下げた。

どうやら、疑いは晴れた様だ。

総介は、メイドの案内で応接間へ通された。

応接間へ入ると、虎ノ介と聖理奈が、既に打ち合わせを始めていた。

「あら、総ちゃん！遅かったわね。待ってたわよ！」

聖理奈は総介の手を引いて、虎ノ介の真向かいのソファに座らせた。

虎ノ介は、厳しい表情で一冊の封筒を取り出した。差出人は、《株式会社鉄興業》となっていた。

鉄興業は、広域指定暴力団鉄組の母体となる会社である。

封筒の中には内容証明が一通入っている。

『・要望書・弁天屋物産株式会社代表取締役社長・大徳寺虎ノ介殿。貴社所有の自社株の四パーセント及び、長女・涼音に対する親権の譲渡を要求する。大徳寺早苗。後見人・鉄眞吾。』

「…これは、どういう事ですか？」

総介が尋ねるより早く、聖理奈が説明を始めた。

三年前。虎ノ介の妻・早苗さなえが、若い男と不倫に落ちた。

相手の男は、鈴木マナブ。当時二三才。鉄組が経営するホストクラブの店長を任されていた男だ。

ある日、早苗は、たまたま友人に誘われて行ったホストクラブでマナブと出合ったのだ。

その後、二人は意気投合し、プライベートでもちよくちよく会う様になり、男と女の関係へ発展するには、そう時間は掛からなかった。

「…結局は、奥さんの不貞行為が原因で、離婚という結果になってしまったのよ」

それが、三年経った今になって、財産分与権や親権の主張をしてきたのだ。

「大丈夫ですよ、社長。財産分与権の主張は離婚後二年が経過しているので無効です。親権の方も、こちらが放棄をしない限りは心配ありません！」

つまり、妻側から送られて来た要望書に関して、法律的拘束力は何もないという事である。

虎ノ介も、その事は充分に理解していた。しかし、問題はこの件に鉄組が絡んでいるという事だ。

鉄組は早苗だけではなく、愛娘・涼音をも手に入れ、虎ノ介を孤独に追い込んだ上で、弁天屋物産を乗っ取るうと考えているに違いない。

「…私は、涼音の父親であると同時に、五万人の社員の生活を守らなければならぬのだ！」

聖理奈は暫く考えた後、徐おもに立ち上がった。

「社長。会社の方は、我々《ハッピー・ロー・カンパニー》が全面的にサポート致しますので、ご安心下さい。涼音さんの方は、彼・甘井総介が命を賭けてお守りします！」

聖理奈はそう言うと、総介の肩をポンと叩いた。

「ははは…、お任せ下さい」

何とも頼りないボディガードである。

・
・
・
・

一六時 分。いつもの様に、涼音を乗せた高級外車が帰宅した。

車を降りた涼音が、正面玄関から屋敷内に入ると、メイドと執事が彼女を出迎えた。

エントランスホールを抜け、リビングに入ると父・虎ノ介がソファに座り、新聞を読んでいた。

「お…おかえり、涼音」

「…なんだ、居たんだ」

父親と数週間振りに会ったというのに、何とも素っ気ない態度だ。

暫しの沈黙の後、虎ノ介は意を決して口を開いた。

「な…なあ涼音、良かったら今夜、久し振りに父さんと食事でもどうだ？」

虎ノ介にとって、娘を食事に誘う事は、女性をデートに誘う事以上に難しい事なのだ。

「私、出掛けるから」

涼音はあっさりと虎ノ介の誘いを断ると、リビングを出て、自分の部屋へ向かった。

・
・
・
・

大徳寺邸を後にした総介は、自転車で帰宅の途に就いていた。

「総ちゃん!」

ドサッ!

聖理奈は自転車の荷台に飛び乗って来た。

「せ…聖理奈さん、二人乗りはマズいですよ」

「堅い事言わないの。昔はよく二人乗りしたじゃない!」

総介と神崎姉妹は幼馴染みだ。

・
・

今から、一五年前。

国内外の各企業による都市開発が進む中で、今なお自然が豊かな街、茨城県つくば市に神崎家の別荘があった。

毎年夏になると、三姉妹は避暑を兼ねて、ここで過ごしていた。

その神崎家の別荘から、そう遠くない場所に外資系企業の研究施設があり、総介の両親は、その施設で働く研究員であった。

近所のテニスコートで、楽しそうに球打ちをして遊ぶ幼い三姉妹と、その様子を金網越しで、羨ましそうに眺めている五才の総介。

「一緒にやる？」

最初に声を掛けてきたのは聖理奈だった。

これが、総介と三姉妹との出会いだった。

それから毎年夏になると、神崎姉妹は総介と会う為、この別荘地へやって来たのだ。

それは、総介達親子が、あの痛ましい飛行機事故に遭うまでの五年間だったが…。

自転車を押す総介の横で、聖理奈は当時の事を思い出していた。

「う…ん…」

「どうかしましたか、聖理奈さん？」

「ううん、何でもない。ちょっとね…、昔を思い出していただけ…」

「…？」

聖理奈は、あの《事故》以来、再び総介の隣で歩く日が来ようとは思ってもいなかった。

・
・
・
・

それは、突然過ぎる一報だった…。

米国ハーバード大学への進学が決まり、新たな出発に心を踊らせていたあの日…。

聖理奈の携帯電話が突然、鳴り響いた。

それは、既に米国へ留学中だった次女・美里亜からの電話だった。

「聖理奈さ…ん、総介さんが…、総介さん達家族が乗った飛行機が…、墜落したの！」

普段、温厚でおっとりとした話し方の美里亜が、かなり動揺していた。

「えっ、今なんて…！？」

「よく聞いてね、聖理奈さん。…総介さん達親子が乗った飛行機が、大西洋沖で…、墜落したのよ！」

この瞬間、聖理奈はとてつもなく深い絶望感に陥った。

それと同時に、両手が震え出して止まらなかった。

英国へ留学中の長女・茉里華からの連絡では、現在、事故の詳細を多方面から調査中との事だった。

『とにかく、こうしてはいられない！！』そう思った聖理奈は、早速、神崎グループ総帥の父・源五郎の口利きにより、チャーター機を手配し、米国へ飛んだのである。

その後、茉里華から奇跡的に総介だけが救助され、ワシントン病院センターへ搬送されたという連絡を受けたのは、それから二日が経過してからだった。

一三時間にも及ぶ大手術の結果、何とか一命を取り留めた総介だったが、その後も意識不明の昏睡状態が続いたという。

それから七年の月日が過ぎたある日…。

晴れて、海外研修を終えた茉里華が一人の少年を連れて帰国した。

一七才になった総介だった。

・
・
・
・

「総ちゃん、もう何処にも行かないよね？私達の前から消えたりしないよね？」

聖理奈の突然の言葉に、総介はキョトンとした表情だ。

聖理奈は、自分の手を自転車のハンドルを握る総介の手の上に重ねると、総介の顔を覗き込んだ。

「私と…私達と、ずっと一緒に居て欲しいの。もう、あんなに辛くて寂しい思いは二度とイヤ！！」

総介は少し考えた後、聖理奈の頭の上にポンと手を置いた。

「大丈夫ですよ、聖理奈さん。ここに僕の居場所がある限り、僕は

何処へも行きませんか」

そう言うと、和やわかな笑顔で聖理奈の頭を優しく撫なでた。

(一つしか違ちがわないのに、まだ私を子供扱あつかいしてる…)

聖理奈の頬がプクツと紅く膨ふれた。

・
・
・
・

警視庁広域犯罪対策本部。通称《広域》。

全国を舞台に暗躍する凶悪犯罪の取り締まり及び、捜査活動を行う部署として、警視庁内に創設された。

本部長は、神崎茉莉華警視。そして、各分野における八人のスペシヤリスト達が、周りを固めている。

公安部長との打ち合わせを終え、《広域》室へ戻る茉莉華の前に、同僚の浅光五郎警視あさみつごろうが姿を現した。

「神崎警視、今日もお美しい」

「フツ、浅光警視こそ、ご聡明そつで何よりだ」

二人は、心にもない挨拶の言葉を交わした。

同僚とは言え、この二人、決して仲が良い訳ではない。

どちらかと言うと、浅光の方が茉里華に敵対心を燃やしている様である。

一流大学を卒業し、警察官となるや、苦労を重ねて三五才で警視に昇格した浅光に対し、英国・ケンブリッジ大学を卒業後、スコットランドヤードでの研修を経て、警視にして《広犯》の本部長という地位を手に入れた茉里華こそ、浅光の猜疑心に火を点けたのである。もつとも、茉里華の方は浅光に対して、《嫌な奴》としか思っていない様だが…。

「いつも、お忙しい事で何よりです。私は、これから副総監とゴルフです。まあ、警視正への昇格は、時間の問題ですよ！ハッハハハ」
そう言い残した浅光は、高笑いをしながら意気揚々と、その場を後にした。

浅光の後ろ姿を見つめながら、茉里華は呟いた。

「今の内に、精々（せいぜい）遊んでおく事だな。ネズミめ…」

【第四話了】

鉄組編 第五話

【第五話】

二二時二分。涼音は今日も《キャサリン》に変装して、繁華街を徘徊していた。

例の如く、取り巻きの連中が、涼音に近付いて来た。

総介は、虎ノ介と約束した通り、連中を追い払う事にした。

「こんばんは、キャサリンちゃ…！」

取り巻きの一人が涼音に声を掛けようと近付いた所、彼女の背後で総介が満面の笑みで立っていた。

取り巻き連中は、そそくさと、その場から去って行った。

「いい加減にしてよね！また、スタンガンを食べりたいの？」

涼音はバッグの中からスタンガンを手らつかせている。

「とにかく、付いて来ないでよ！」

ガッ…！

涼音は、総介の脛を思いつ切り蹴飛ばし、走り去って行った。

「あいたたた…。まったく、とんだジャジャ馬ですねぇ…」

・
・
・
・

「ハアハア…」

何とか総介を撒いた涼音だったが、気が付くと、大通りの交差点の角にいた。

ふと見上げると、黒いスポーツカーに乗った見覚えのある若い男が、涼音の目に止まった。

「…アイツだ！」

涼音は、黒いスポーツカーの後を走って追いかけた。…が、スポーツカーは、すぐに近くのコインパーキングに入庫した。

車内からは、金髪でチンピラ風の若い男が出て来た。

涼音は、その男の後を追った。

男が、外から鏡張りのエントランスが見える《クラブ曖昧》に入っ

て行く姿を目撃した涼音も、後を追って店内へ入った。

そんな涼音の後を総介は、付いていた。

「うーん、ホストクラブですか…」

さすがにホストクラブともなると、総介一人で入るには抵抗がある上に、先立つ物もない。

そうかと言って、このまま涼音を放っておく訳にもいかない。困った。

店の前で行ったり来たりを繰り返している総介に、通りすがりの女性が声を掛けてきた。

「あら、総介さん！どうしたんです？こんな所で…」

帰宅途中の美里亜が、偶然にも通り掛かったのだ。

《渡りに舟》とはこの事だ！総介は、事情を説明して、店内へ一緒に入ってもらおう様に頼み込んだ。

「良いですよ。私も、一度は行って見たかったですよ、ホストクラブに！」

意外にあっさりと承諾してくれた。むしろ、乗り気だ。

美里亜は、総介の腕を引っ張り、意気揚々と店内へ入って行った。

「いらっしゃいます〜！《クラブ曖昧》へようこそ〜！」

エントランスでは、一人のホストが出迎え、料金システム等の説明を始めた。

重量感のある革張りの扉の横には、ランク付けされたホストの顔写真が張り出されている。

『一番人気・シノブ、二番人気・シヨウ…』

どのホストも、アイドル並みの美少年ばかりだ。

「ねえ、総介さ〜ん。この子、可愛いと思いませんか？」

美里亜は、一人ではしゃいでいる。

「…以上が、当店のシステムとなっております。では、ごゆっくりとお楽しみ下さい！」

そう言うと、ホストは革張りの分厚い扉を開けた。

「「「いらつしゃいませ〜！」「」」

何と、左右にズラリと整列したホスト達が、二人を出迎えたのだ！

「すごい…、すごいですよお！総介さん！」

美里亜のテンションは更に上がった！…だが、総介はそれどころではない。

総介は店内を見渡し、涼音の姿を見つけ出すと、店員の案内を押し除けて涼音の真後ろの席を陣取った。

総介は気付かれぬ様に、涼音の様子を伺った。

「いらっしやいませ、シノブです！」

一番人気のシノブが、涼音の席にやって来た。

「違うわよ！私が指名したのは、マナブよ！鈴木マナブ！！居るんでしょ！？？」

どうやら涼音は、スポーツカーの男を指名していた様だ。

「しかし、彼はちょっと席を外せませんので……」

困り果てるシノブに対し、涼音は財布の中からセレブの証《ア〇ツクス》のゴールドカードをチラつかせた。

「し、少々お待ち下さい！」

シノブは涼音のカードを目にした途端、一目散に奥の事務所へ駆け込んで行った。

（一六才の娘にアメ〇クスのゴールドカードを持たすなんて、お金持ちの考える事は解りませんね……）

総介の心の声だ。

「総介さ〜ん、楽しんでますう？」

美里亜の呼び掛けに総介が振り向くと、そこにはとんでもない光景が広がっていた！

何と、美里亜の周りには上位ランクのホスト達が取り囲み、それぞれが高級ワインのラツパ飲みをしていたのだ！

更に、テーブルの上には、背丈程の巨大フルーツ盛り合わせが置いてあり、今まさにシャンパンタワーが始まるうとしていた。

「総介さ〜ん、見て下さい！すごいでしょう？」

美里亜は、大はしゃぎだ。

一方、総介は料金の事が気になって仕方がない。

「総介さ〜ん、お金の事なら心配いりませんよお！」

そう言いながら、美里亜は財布の中から超セレブの証《アメツ〇スのブラックカード》を取り出した。

周りからは「おおー！」「」の歓声が沸き起こる。

・
・
・

「五番テーブルのガキが店長を御指名ですが…」

「ああっ!？」

その頃、シノブは事務所のマナブに、「メックスのゴールドカード」を持つ少女の事を報告していた。

鈴木マナブは、「クラブ曖昧」の店長だ。広域指定暴力団鉄組の構成員で、四年前からこの店を任されていたのだ。

マナブは、店内監視用カメラのモニター席に座り、五番テーブルのゴスロリ娘にカメラの照準を合わせた。

「あのガキ、どこかで…」

・
・
・
・

二才と偽って《クラブ曖昧》に入店した涼音だったが、実年齢一六才の彼女がこういった《大人の店》に入る事自体、初体験であった。

涼音は、周りを見渡した…。

若いホストに色目を遣う中年女性。ホストに勧められるままウイスキー飲み干す女性。

そして、十数人のホストをはべらせ、派手に騒いでいる真後ろのテーブルの若い女性…。

「…みんな、バカみたい」

涼音は一人、水を飲みながらマナブを待ち続けた。

「お待ちせ致しました。マナブです。まず、何かお飲み物を…」

マナブがメニューを開こうと、手を伸ばした瞬間、涼音がマナブの腕を掴んで身を乗り出した！

「お母…あの女に会わせてよ！」

「…は？」

「お父さんと私を捨てて、アンタの所に行った女…、大徳寺早苗に会わせてって言ったのよ！」

マナブは、目の前のゴスロリ娘が、弁天屋物産の社長令嬢だという事に、今ようやく理解した。

涼音は、自分と父親を捨てた母親の早苗に会わせると、尚も食い下がる。

「わ…分かりました。あちらのVIPルームで、お待ち下さい」

マナブは、シノブに涼音をVIPルームへ案内する様に命じた。

VIPルームは、店内奥の通路の突き当たり。これまた重量感のある分厚い扉を開けると、殺風景な室内の真ん中に、ダブルベッドがポツンと置いてあるだけの部屋であった。

「な…何よ、この部屋？あの女に会わせてくれるんじゃないの！？」

涼音が振り返ると、シノブの姿は既になく、ドアは閉じられ、外から鍵を掛けられてしまっていた。

「ちょっと、開けなさいよ！」

ガチャ…

その時、部屋の奥の内ドアが開いた。

奥の部屋からは、屈強な二人の黒人男が、黒いビキニパンツ一枚の姿で現れた。

この時、涼音は今までに経験した事のない様な身の危険を感じた。

「やめて、来ないで！」

いくら叫んでも、いくら逃げ回っても、防音壁の部屋からでは、外へは聞こえない…。

事務所の監視モニターには、VIPルームの映像が様々な角度で映し出されている。

そもそも、鉄組の収入源の一つに、《違法アダルト動画サイトの運営》というモノがある。

児童ポルノ等の違法アダルト動画は、世界中のマニアが高値で購入する為、かなりの需要があった。

鉄組が制作する、それらの違法アダルト動画は、この部屋で撮られている事が多い。

今、この部屋の中では、泣きわめく涼音が二人の黒人男に羽交い締めになされ、衣服を剥ぎ取られていく様子が淡々と撮られている。

「いやああああー!!」

マナブは、モニターに映し出される映像を見ながら、ニヤニヤと薄笑いを浮かべていた。

「…ッ!？」

その時、突如ドアが開き、見知らぬ男が部屋の中に入って来た!総

介だ！

まず、総介は黒人男の一人が、殴り掛かって来たのをあっさりと薙ぎ倒し、自らの拳を男の鳩尾みぞおちにめり込ませた！

男は苦悶の表情と共に失神した。

もう一人の黒人男は、何処からともなくナイフを取り出し、総介に切り掛かって来た！

総介は、迫り来るナイフをいとも簡単に払い飛ばし、男の懐に素早く潜ると、下顎あごめがけて掌打てむちを突き上げる様に放った！

そして、男は崩れ落ちる様に倒れた。

「何だ、コイツ…!？」

たった一人の貧相な男に、用心棒の大男が二人共、僅か数秒で伸されてしまったのだ。マナブの額からは脂汗が滲み出していた。

更にモニターの中の総介は、カメラを通して、こちらに向かってニヤリと不敵に微笑んだ。

マナブは、懐の拳銃を握り締めたが、その手は小刻みに震えていた。

バンツ…！

突然、事務所のドアが外から蹴破られた！

「鈴木マナブ！未成年略取及び、児童ポルノ禁止法違反の現行犯で

確保する！」

茉里華が部下達を引き連れて現れた。

広域犯罪対策本部長の茉里華は、以前から鉄組の壊滅作戦に着手してきた。

組への資金流入を塞ぐ為、関連企業及び、営利団体の摘発を地道に行なってきたのだ。

当然、《クラブ曖昧》も摘発対象の一つに挙げられていた。

「まだまだ余罪がありそうだな。全て吐いてもらおうぞ！」

茉里華は、部下の捜査員に、マナブの身柄を本庁へ連れて行く様、命じた。

店は警察の介入により、既に閉鎖されており、捜査員達は客や従業員に対し、訊問を始めた。

VIPルームに残された涼音は、ベッドの上で剥がされた衣服を身体に押さえ付けながら、背中を向けていた。

その小さな肩は、小刻みに震えていた…。

心配した総介が、手を差し延べようとした所、美里亜は総介の腕を押さえ、首を横に振った。

(私に任せて下さい…)

美里亜はシーツを二つに折り重ねると、涼音の肩に掛けてあげた。

そして肩を優しく抱き寄せ、何やら話し始めたのである。

何を話しているのか分からないが、涼音に語り掛ける美里亜の表情は、優しさに満ち溢れていた。

すると、涼音の大きな瞳から大粒の涙が零れ落ちてきた。

涼音は、美里亜の胸にしがみつき、大声で泣き出してしまった。

総介は、その光景をただ黙って見ているしかなかった…。

「ご苦労だったな、総介！」

茉里華が冷たい缶コーヒーを投げ渡した。

「いえ、仕事ですから…」

浮かない笑顔だ。総介は、涼音を未遂とはいえ、レイプ紛いの目に遭わせてしまった事を後悔していたのだ。

「総介、お前に伝えておく事がある」

CIA(アメリカ中央情報局)に勤める茉里華の友人から今朝、入った情報だった。

アメリカ国内で激化するマフィア同士の抗争の最中、各地ではフリーランスの狙撃手スナイパーが暗躍しているというのだ。

その中でも、凄腕の二人組が日本へ向けて出国したという情報だ。

茉里華はすぐ様、入国管理局と公安調査庁に問い合わせた所、確かにそれらしき二人組が入国し、その後、鉄組幹部と接触があったという返答をもらった。

「お前がまだ、この件に携わるというのなら、充分に気を付ける事だな」

茉里華は総介にそう忠告すると、店内の搜索の指揮にあたる為、部屋を出て行った。

気が付くと、涼音は美里亜の膝枕で眠っている。

その寝顔は、安堵の色に包まれていた…。

【第五話〜了〜】

鉄組編 第六話

【第六話】

「パパ…、ママ…」

見渡す限り広がる大草原。

和かい陽射しと温かいそよ風が、心地良い。

草花と土の匂いが、生きていることを実感させてくれる。

遠い昔、幼い頃の涼音の思い出。母の手作り弁当を持って、親子三人、大草原で過ごした優しい時間…。

遊び疲れると、決まって父親がおぶってくれた。

父親の広い背中の中で、いつの間にか寝てしまう涼音。

涼音にとって、一番幸せだった頃の思い出だ。

「お父さん、じめんね…」

・

涼音は、自分の寝言で目を覚ました。

久しぶりに夢を見た気がする。しかも幼い頃の、とても幸せだった頃の夢を…。

涼音は、しばらくの間、夢の余韻に浸っていた。

「お目覚めですか？」

涼音はハツとした。気が付くと、自分が総介の背中に揺られているではないか！

「な…何で、アンタがここにいるのよ！？…そりゃあ、助けてくれた事は感謝してるけど、それとこれとは話は別よ。降ろしなさいよーっ！」

涼音は、総介の首を思い切り絞めた。

「元氣を取り戻したようですね。涼音さん？」

もがき苦しむ総介を尻目に、美里亜が優しく微笑む。

「お姉様あ！」

（お姉様あ！？）

総介と美里亜は、顔を見合わせた。

「涼音さん。寝言で、お父さんに謝っていましたよ」

「ア…アンタ、人の寝言を聞いてたのね？何て、悪趣味な奴なの！？」

涼音は、総介の首を絞めた上に、頭を左右に振り回した。

「わわっ…！み…美里亜さん、助けて…下さ…い…！」

必死に助けを求める総介だったが、美里亜は、ニコニコと微笑んでいるだけだった。

「…私ね、私とお父さんを捨てた、あの女が許せなかったんだ。もし会う事が出来たら、一発でもいいから殴ってやりたかった…！」

涼音は、気分が晴れたのか、二人に本音を話し始めた。

事の始まりは、二週間前に逆上る…。

・ ・ ・

いつもの帰り道、涼音は車の後部座席から、何となく外を眺めていた。

駅前通りに差し掛かった交差点での信号待ちの際、同じく隣りで信号待ちをしている黒いスポーツカーを何気なく眺めた。

その直後、涼音は目を疑った。

何と、スポーツカーの運転席には、自分と父親から、大好きだった母親を奪ったあの男…、鈴木マナブが座っているではないか！

そして、信号が青に変わると、マナブの車は左へ曲がり、繁華街の中へ消えて行ったのだった。

『マナブさえ捜し出せば、きっと母親にも会えるのではないか？』

そう考えた涼音は、その日の夜から、繁華街を歩き回る様になった。

「では、何故キャサリン…いや、あの変装を？」

総介は、以前から気になっていた質問をした。

「…それは、マナブってヤツにも顔を知られているし、知り合いと会った時のカムフラージュよ。それに…」

急に涼音の顔が紅くなった。

「…それに、一度、あんな格好を試みたかったのよ！」

「くくっ…、可愛いですね」

総介が、思わず吹き出してしまうと、涼音の顔は更に紅くなった。

「アンタに言われなくないわよっ！アンタにつ！」

・
・
・
・

三人は、今後の事を相談する為、一旦《喫茶店ひだまり》へ戻った。

《喫茶店ひだまり》では、聖理奈と一緒に虎ノ介も待っていた。

虎ノ介は、警察（茉里華）からの連絡を受け、得意先との接待中だったにも拘らず、大急ぎで駆け付けたのだ。

虎ノ介は、涼音の無事な姿を見るや否や、駆け寄り、キツく抱き締めめた。

「ち…ちよっと、やめてよ！放して！」

涼音は、虎ノ介の腕から逃れようと、必死にもがいている。

「良かった…、お前が無事で、本当に良かった！」

そう言って涙ぐむ虎ノ介の頬を涼音は、両手で押さえると、掠れた声で言った。

「じめんね…、お父さん…」

・
・
・
・

「ターゲット確認。どうだ、ウルフ？」

「確認出来たぜ、マスター！」

ネオンが輝く駅前ビルの屋上に、その二人はいた。

黒のスーツに身を固めた《マスター》と呼ばれるロマンスグレーの初老の紳士は、電子スコープで《クラブ曖昧》の周辺を監視していた。

そして、その相棒・《ウルフ》と呼ばれる白人青年は、鬱伏せの状態でライフル銃を構えている。

「距離：八。行けるか？」

「俺を誰だと思ってる、マスター！？全米のマフィア共を震え上がらせている最強のスナイパー・《ウルフ》ザ・キッド様だぜ！」

ウルフはターゲットに照準を合わせた。

「よく見てろよ。これが、日本での俺のデビュー戦だぜ！」

そして、ウルフは引き金を引いた…。

・ ・ ・ ・

「はい、ホットミルクですよ。身体が温まりますから、どうぞ」

美里亜が、カウンターにホットミルクを並べた。

ほんのちよつとのバターと蜂蜜を混ぜた美里亜特製のホットミルクは、まるやかな口当りとほんのりとした甘みが口の中に広がる、《喫茶店ひだまり》の人気メニューの一つだ。

「ホントに、美味しいです。お姉様あ！」

涼音が感激した。

（ ）（お姉様あ！？）（ ）

総介と聖理奈と虎ノ介の三人は顔を見合わせた。

これで何とか、一段落着いたかに思われたが、聖理奈だけは、何やら浮かない表情だ。

「社長、実は確認しておきたい事が…」

その時、聖理奈の言葉をかき消すかの様に、フェーリーの近所迷惑なエンジン音が、店の外から聞こえてきた。

カランカラン…！

やはり茉里華だ。…と、もう一人。

茉里華は、連れの男の首根っこを掴んで、店内へ放り投げた。

茉里華が連れて来た男は、《クラブ曖昧》のナンバーワンホスト・シノブだった。

彼は、何かに怯えている様子で、体中ガチガチと震わせていた。

「まあ、どうかしましたか？」

美里亜がカウンターから出て来て、倒れ込んでいるシノブに手を差し延べた。

「どうしたもこうしたも…。鈴木マナブが、狙撃された！」

皆、言葉が出なかった。特に、涼音の表情は驚愕に満ちていた。

鈴木マナブの身柄を本庁へ移送する為、パトカーに乗り込もうとした時、何者かによって狙撃されたという。しかも、捜査員の目の前で。

「恐らく、鉄組が接触したという、例の二人組の外国人スナイパーの仕業に違いない」

マナブの逮捕により、鉄組にとって、不利益な情報が表沙汰になる事を懸念しての犯行だろうか？

そうだとすれば、マナブに一番近い存在であり、常にマナブと行動を共にしていたシノブが、次の標的になる可能性が高い。

そう考えた茉里華は、取り敢えず、シノブをここへ連れて来たのだ。

「ここから放り出されたくなければ、洗いざらい話す事だな！」

茉里華は、怯えるシノブの胸ぐらを掴んでは突っ撥ねた。

茉里華は、少タイラついていた。

それは、一度は確保した容疑者を本庁へ移送する前に、捜査員の目の前で殺害されてしまった事である。

これは、警察の威信に関わる問題へと発展する事は必至だ。

茉里華は、シノブに対して幾つかの質問をした。

やはり、命には代えられないと判断したのか、シノブは茉里華の質問に対し、素直に答え始めた。

その結果、鉄組の悪事が、次々と明らかになったのである。

麻薬・覚せい剤等の密売。違法アダルトサイトの運営。靈感・マルチ商法。民間企業に対する脅迫及び恐喝。そして、殺人…。

シノブの証言のお陰で、警察が摘発した鉄組の関連団体に対する裏付け捜査が、容易になった事は言うまでもない。

「ほ…本当に俺を守ってくれるんだろっな？」

シノブは茉里華の足首にすが縋る様にしがみついた。

「心配するな。世界一頼りになる男がそこにいる！」

皆、一斉に総介に顔を向けた。

「い、いやあ…ハハハハ…」

総介は、ヘラヘラと笑っている。

「ち…ちよつと待ってよ、茉里姉！勝手に話を進めないでよ！」

聖理奈が、話に割って入った。

「総ちゃんは、まだ調査継続中なのよ！私だって大徳寺社長に、どうしても確認しておきたい事があるんだから！」

聖理奈は、鞆の中から数枚の資料を取り出すと、虎ノ介の前に立った。

「社長、正直に答えて下さい。それに、涼音さんも。これから私が話す事をちゃんと聞いて下さい！」

実は、昨晚、弁天屋物産顧問弁護士・神崎聖理奈の呼び掛けで、同社の取締役会と顧問税理士を交え、社長不在の食事が行なわれた時の話だ…。

今でこそ、国内屈指の優良企業として名高い弁天屋物産だが、実は、三年前の大不況の煽りを受け、一時倒産の危機に追い込まれた時期があったのだ。

その当時の銀行は、債券回収の期待薄な企業への融資を断り続けていた。

御多分に漏れず、弁天屋物産もまた、それらの企業の一つに数えられていたのである。

そんな時、無担保・低金利で多額な融資を申し出た金融業者があった。

それが、《鉄興業》であった。

鉄興業による多額の融資を受けたお陰で、何とか再建の目処めどが立った弁天屋物産は、その後、大企業へと上り詰めて行くことになった。

しかし、時を同じくして、虎ノ介と早苗は、離婚をしてしまう。

しかも、離婚後三年経った今でも、虎ノ介に掛けられた高額な生命保険の受取人名義が、大徳寺早苗になっているのだ。

「そ…それは…」

聖理奈の指摘に、虎ノ介の額から脂汗が流れ落ちる。

「担保だよ！」

シノブが口を挟んだ。

つまり、万が一に返済不可能となった場合でも、予め債務者に対して債券に相当する額の生命保険を掛け、その受取人名義を債務者の親族又は配偶者とする事で、債券の未回収を防いでいると言っただ。

その際、受取人の身柄は鉄組の管理下に置かれる。所謂、人質だ。

「それが本家（鉄組）のやり方だよ」

突如、涼音が虎ノ介に掴み掛かった！

「お父さんは、それを知ってて…、お母さんを売ったの？…私には、『お母さんは、私達を捨てて、若い男の所へ行った！』って言ったのも嘘だったの！？」

涼音の手に力が入る。

「す…すまん、涼音。しかし、私は…、家族を守ると同時に、社員
の生活も守らなければならなかったんだ…」

当時、虎ノ介が悩み苦しんでいる事に気付いていた早苗が、自ら鉄
興業に出向いて、契約を結んでしまったというのが事実である。

その後、虎ノ介は会社の再建と、一刻も早く妻を取り戻す為、昼夜を問わず、必死に働いた。

そして、会社も軌道に乗り、借金も完済した頃だった…。

「今度は、妻の身柄と引き換えに、金を要求される様になったんだ…」

鉄組の要求は、次第にエスカレートしていったのであった…。

【第六話了】

鉄組編 第七話

【第七話】

「ハハハ…、いたいた。見つけたぜえ！」

《ひだまり通り商店街》が一望出来る、とある七階建てのマンションの屋上では、ウルフザキッドがライフル銃を構えながら、暗視スコープを覗いていた。

マスターはその横で、《喫茶店ひだまり》周辺の状況を監視している。

この場所からだと、店の中の様子を辛うじて確認する事が出来るのだ。

「…ターゲット確認。距離二二〇。南東の風二・三。視界レベルは二」

マスターが的確な情報を伝える。

「こんな仕事サッサと終わらせて、寿司でも食いに行こうぜ。マスター！」

ウルフはターゲットに照準を合わせ、引き金に指を掛けた…。

・
・
・
・

「ちょっと待って下さい！」

美里亜が、珍しく話の腰を折った。

「今までの話を総合すると、鉄組さんの目的は、社長さんに掛けた保険金なんですよねえ？そうだとすると…。」

(…ッ！！！)

その時、脳内に突き刺さる様な《閃き》を感じた総介は、咄嗟にカウスターに置いてあったステンレス製のお盆を虎ノ介目掛けて放り投げた！

一キロメートル以上離れたマンションの屋上から撃ち込まれた弾丸は、テラスの窓を貫通し、総介が放り投げたお盆に弾かれ、僅かに虎ノ介のこめかみを擦った…！

それと同時に、総介は美里亜から預かっていた拳銃を素早く抜くと、反対に外へ撃ち返した！

その瞬間、総介の銃口からは、レーザーに似た赤い光線状の弾丸が

発射された！

一瞬の沈黙の後、皆は周りを見渡した。

弾丸が貫通して、穴が開いてしまったテラスの窓。弾丸のキズ跡がくつきりと残ったステンレス製のお盆。弾丸がめり込んだ壁。

そして、虎ノ介のこめかみから流れ落ちる一筋の血。

一同は、言葉を失った…。

「お父さん！！！」

虎ノ介のこめかみから流れ落ちる血を目にした涼音が、泣き叫んだ！

「だ…大丈夫だ。かすり傷だから…」

虎ノ介はそう言いながら、涼音の頭を優しく撫でた。

「やはり、狙われていたのは、社長さんだったのですねえ。…あらあら、お盆もこんなにしちゃって…」

美里亜は、床に落ちたお盆を拾い上げた。

「美里亜さん、この銃はいつたい…？」

総介は、美里亜から預かった拳銃をマジマジと見入った。

「それはですねえ、《リニアールガン（電磁加速射出砲）》の原理を応用して、よりコンパクトにした《ハンドレールガン》て言う

んですよ！」

一見、小さな喫茶店を営む《癒し系キャラ》の美里亜かと思いきや、その正体は、僅か一六才にして米国マサチューセッツ工科大学バイオ工学科を首席で卒業し、在学中に発表した論文『医療に於けるバイオテクノロジー』が評価され、博士号を取得。そして、帰国後、医師免許も取得。更に、軽くて強くて軟らかい新素材《チタニウム合金X》を発明し、『現代の錬金術師』として高い評価を得ているスーパーマッドサイエンティストだったのである。

因みに、《喫茶店ひだまり》の地下には、秘密の研究施設があるという。

「今のは、私を狙ったのか…？」

大徳寺父娘は、共に抱き合いながら、その場にへたり込んだ。

「でも社長、心配する事はありませんよお！彼が、お二人の事をお守り致します！別料金で！」

さすがは美里亜である。この非常時でも、商売を忘れてはいない。

「彼は、一体…？」

虎ノ介が、尋ねた。

「彼の本業は、《国際公認スーパー》だ。腕は確かだ。私が保証しよう」

茉里華が、総介の肩の上に手を置き、虎ノ介に説明した。

「こ…国際公認スーパーなんて…、初めて見たぞ…」

虎ノ介は、驚きを隠せない。

《国際公認スーパー》は、世界でも、そう多くは存在しない。

更に、彼等は身の回りの安全を保つ為、自身の身分を明らかにして
いないのだ。

従って、一般人が彼等の素性について知らないのは、当然の事であ
る。

「…総介、始末したのか？」

向かいのマンションを指差し、茉里華が尋ねた。

「いいえ、警告ですよ」

笑顔で、そう答える総介の眼は、遙か向こうのマンションの屋上を
見据えていた…。

・
・
・
・

《ひだまり通り商店街》を見渡す事が出来る七階建てのマンション

の屋上では、ウルフ＝ザ＝キッドがライフル銃を構えたまま、硬直していた…。

彼の背後のコンクリートの壁には、小さな穴が開いており、それが見事に貫通していたのである。

そして、彼の左頬には真一文字の傷がついている。

「…見たか、今の？…アイツ、俺の弾丸を弾いただけじゃなく、逆に撃ち返して来やがった…」

ウルフの左頬が赤く染まる。

「アイツ、スコープ無しで、肉眼で…、俺を狙ったっていうのかよ…！？…ありえねえ、ありえねえぞ！」

ウルフは、ライフル銃に次の弾丸を込め、再び照準を合わせた。

「ウルフ、もういい。帰るぞ！」

マスターはウルフを制止し、帰り支度を始めた。

「何言ってるんだ、マスター！？次は必ず仕留めてやるからよ！今度はアイツも…」

カチャ…！

マスターは、ライフル銃を構えるウルフの後頭部に拳銃を突き付け

た。

「ウルフ…、戦場では《次》も《今度》もない！作戦の失敗は、《死》につながるのだよ。覚えておきたまえ」

引き金に掛けた指に、力が入る。

「オ…OK、マスター！アンタに従うよ…」

ウルフは、素直にライフル銃を置いて、両手を上げた。

「ああ、良い子だ、ウルフ…」

(間違いないな。あの男、…カマエル)

・
・
・
・

広域指定暴力団《鉄組》。

全国に、一五〇〇の組や団体を傘下に持ち、約一〇〇万人の構成員を抱える国内最大の暴力団組織である。

その頂点に君臨する者こそ、鉄組四代目組長・鉄眞悟くろがねしたけである。

彼は、先代から受け継いだ豊富な資金力を元手に、全国各地の中小

団体を買収する事によって、その勢力を拡大してきた。

更に、諸外国のマフィアとも連携を取りながら、ヤクザ社会の新しいビジネスを形作ったのだ。

そして今、都心のオフィス街の中心地に、鉄興業本社ビルが、堂々と聳え立っているのである。

そのビルの最上階のフロアでは、鉄眞悟が夜明け色となった街並を眺めていた…。

コンコン…

眞悟の忠実なる右腕・海堂勇かいどうゆうみが、眞悟のオフィスへ入って来た。

「例の二人組の外国人スナイパーが、大徳寺虎ノ介の暗殺に失敗致しました。しかも、彼らは大徳寺虎ノ介から、手を引くそうです」

「フン…構わんよ。所詮は、薄汚い殺し屋不勢だ。替えなら、幾らでもいるしな。しかし、弁天屋の本体を何としても手に入れたいものだな」

眞悟は何としても、来週の《定例総会》までに、国内屈指の大企業である弁天屋物産の経営権を是が非でも手中に治めたいと考えていたのである。

それと言つのも、最近、組の関連企業・団体が警察に相次いで摘発を受けたことにより、鉄組本体の資金確保に手間取っていたからである。

これでは、《本家》としての面目を保つ事が出来ない。

全国の鉄組傘下の《長》が一同に会する《定例総会》は、《本家》の豊富な資金力をアピールする絶好の場なのだ。

「海堂！この際、娘でも父親でも構わん。必ず、ここへ連れて来い
！」

「…かしこまりました」

海堂は深々と頭を下げ、眞悟のオフィスを出ると、早速携帯電話を手にした。

「海堂だ。メンバーを集める！今すぐだ！」

・
・
・
・

翌朝、新聞各紙では、昨夜の警察による大失態の記事が、大きく軒を連ねていた。

『容疑者確保後、移送時に狙撃される！』『捜査員に付き添われながらも、被疑者殺害される！』

テレビ・ラジオ・新聞・週刊誌等のあらゆるメディアが、この《失態劇》に食らい付いた。

警視庁は、この件に関して捜査責任者である神崎茉里華警視本人が、釈明会見を行う事をマスコミ各社に発表した。

即日、警視庁記者クラブセンター内特設会場に於いて、会見が行われた。

会見場に茉里華が登場するや否や、場内では物凄い数のフラッシュが焚かれた。

弱冠二四才で警視にまで上り詰めたスーパーキャリアが、モデル並みのスタイルと美貌を兼ね備えているとあれば、マスコミが食いつかない訳がない。

その模様は、テレビ中継もされ、局によっては特番を組む所もある程だ。高視聴率間違いなしである。

茉里華は、まず家宅捜査から容疑者確保に至るまでの経緯を説明した。

そして、『容疑者確保から狙撃されるまでの一連の措置に、不備はなかったか?』、『警察に落ち度はなかったのか?』について、検証を交えながら、事細かに説明したのである。

そして最後は、記者団からの質問攻めだ。

茉里華は、一つ一つの質問に対し、懇切丁寧に答えた。

「ふうー！」

茉里華は会見終了後、《喫茶店ひだまり》に立ち寄った。

「ご苦労様でした。姉様」

美里亜は、茉里華お気に入りの《スーパー・デラックス・ロイヤル・ストレート・アメリカンコーヒー》を淹れた。

茉里華は、コーヒーの香りを堪能しながら、ゆっくりと飲み始めた。

「姉様、お仕事の方は宜しいのですか？」

美里亜は、心配そうに聞く。美里亜も、朝からの会見特番を観ていたのだ。

「後の事は、部下に任せて来たからな。心配ないさ」

茉里華は今後、査問委員会の審議にかけられ、正式な処分が下されるまでは、目立った行動を慎まなくてはいけない。

「ところで、総介達からは、何か連絡はあったか？」

結局、シノブを本庁へ移送したのは、朝方になってからで、その後は、会見の準備やら何やらでゴタついていたのだ。

「いいえ、今のところは何も…」

茉里華は、鉄組から狙われている大徳寺親子に出来るだけ、日常生活を行える様に、ある提案をしていたのだ。

比較的、狙われる危険性の高い虎ノ介には、総介がボディガードとして側に付き、涼音に至っては、暫くの間、自宅待機とした。

その際、茉里華の部下が数人で、大徳寺本宅の周辺を警護することとしたのである。

そして、万が一にもイレギュラーが発生した場合は、迅速な対応が出来る様にと、聖理奈を涼音の近くに置いたのだ。

鉄組の《定例総会》までの間が勝負と考えた茉里華は、敢えてこの布陣を敷く事にした。

「それはそうと、相変わらずこの店の客は…、むさ苦しいな…」

茉里華は、スーパー・デラックス・ロイヤル・ストレート・アメリカンコーヒーを飲み干し、代金三　円をカウンターの上に置くと、黙って店を出た。

【第七話了】

鉄組編 第八話

【第八話】

総介は、鉄組の《定例総会》を目処^{めど}に、虎ノ介のボディガードとして彼に付き添う事となった。

まずは、社長付きのボディガードとして恥ずかしくない様に、身なりを整えることから始めた。

当然の様に、聖理奈と涼音が見立て役としてついて来た。

まずは、アルオーニでスーツを選び、リーオルで靴を選び、美容院ではボサボサ頭をサツパリとカットしてもらい、次いでに無精髭も剃り、何故かメンズエステまでも行く羽目になってしまった。

当然ながら、それらの費用は全て虎ノ介のポケットマネーだ。

そして総介は今、新しく生まれ変わったのである。

「あの…、どうでしょうか？変ですか？」

総介はドレスルームから、バツが悪そうに出て来た。

「…本当に、総ちゃん？」

「…ウソ!？」

聖理奈と涼音の二人は、目を見開いた。

総介は、元々顔の造りは悪くはないのだが、無精な性格の所為か、外見に対しては今まで全く気を遣っていなかったのである。

下ろしたての黒いスーツにピカピカの革靴。そして、バツチリとキメた髪型で総介は現れたのだ。

総介の余りの変わり様に、二人は不覚にも見とれてしまった様だ。

・
・
・
・

社長業はとても忙しい。

朝、出社したと同時に会議。移動の車中でも会議。昼・夕食時でも会議。

とにかく、一日中会議の連続で、休む間もない程の忙しさだ。

結局この日、仕事が片付いたのは、真夜中の二時を過ぎていた。

「どうだ、一日を通しての感想は？」

総介と虎ノ介は、二十四時間営業のファミレスへ来ていた。

「いやー、正直に言って、社長さんの仕事が、ここまで忙しいものだとは思いませんでした。それに…」

総介は店内を見回した。

「私がいつも、ステーキや懷石料理を食べているとでも思ったかね？」

虎ノ介は接待や商談以外では、こうした二十四時間営業のファミレス等で食事を摂る事が多く、本当に時間がない時にはコンビニのおにぎりで済ますこともあるという。

これでは、涼音を構ってあげる事も出来ない。

「今回、君達のお陰で涼音との距離が少し近付いた様な気がするよ。ありがとうー！」

総介は、深々と頭を下げる虎ノ介に対し、恐縮してしまった。

「ところで総介くん、この件が終わったら…、私専属のボディガード兼秘書をやってもらえないだろうか？」

突然のヘッドハントだ。

「いずれは、ウチの婿養子として君を迎え入れたい。行く行くは、私の後を継いで、会社を任せたいとも思っている。どうだろうか？」

総介は、虎ノ介に相当気に入られた様だ。

確かに、条件としては魅力的だ。今の生活を一八度変えるチャンスでもある。

その時、総介の脳裏に、ある女性の言葉が浮かんだ…。

『まだ、多くの人が…、貴方の助けを求めているのよ…。だから…』

彼女は、総介の人生に多大な影響を与えた女性だった。

総介は暫く考えた後、こう言った。

「僕の助けを必要とする人達がまだいる様ですから、その話は申し訳ありませんが、お断り致します」

今度は、総介が頭を下げた。

「いや、いいんだ！忘れてくれ。済まなかったな」

虎ノ介の未来予想図は、敢えなく崩れ落ちてしまった。

・
・
・
・

大徳寺邸周辺では、茉里華の部下の捜査員達が、六人体制で大徳寺

涼音の警護をしていた。

自宅待機三日目に突入し、涼音のストレスはピークに達していた。

「あーっ、ヒマヒマヒマヒマヒママーッ！」

一六才の涼音は、遊びたい盛りだ。元々、アウトドア派の彼女にとって、《自宅待機》というのは拷問に等しいのである。

学院には、《短期休学届》を提出したが、逆に学院側からは、授業を受けられない分の課題（宿題）をゴツソリと頂いたのである。

自宅待機の間は、聖理奈が家庭教師を兼ねて、涼音の勉強を見ていた。

「ねえ、聖理奈さん。ちょっと、休憩にしようよ！」

始めて一分も経たない内に、このザマだ。つくづく、我慢を知らない娘である。

「ダメよ！この課題をクリアしてからね！」

聖理奈も負けじと言い返す。

コンコン…！

丁度その時、メイドが涼音の部屋のドアをノックした。

「お嬢様。神崎美里亜様という方が、お見えです」

メイドの後から美里亜が、バスケットケースを持って現れた。しかも、中身は空である。

「お姉様あ！」

涼音が、美里亜に飛び付いた！

聖理奈は、ホッと一息ついた。

美里亜は、手作りのチーズケーキを差し入れにと持って来たのだが、来る途中、捜査員達に配って来たのだという。

「ごめんなさいねえ…。私ったら、何をしに来たのか分かりませんよねえ…？」

実際に二人共、暇を持て余していたのは正直な所だ。

特に涼音は、憧れの《お姉様》に会えた事が余程嬉しいのか、大はしゃぎである。

三人は他愛もない世間話に花を咲かせた。

「総介、どうしてるかな…？」

何の脈絡もなく、涼音が呟いた。

「きつと、テンパってるわね。ああいう堅苦しい場所に慣れてないから、総ちゃんて」

「むう…！」

総介の事なら、何でも知っているかのような聖理奈の口振りに、涼音は思わず頬を膨らませた。

「二人共、総介さんの事が好きなんですねぇ？」

涼音と聖理奈のやり取りを眺めていた美里亜が、口を挟んだ。

二人の顔が急に紅くなった。

「そ…そう言う美里姉は、どうなのよ？」

聖理奈が、お返しとばかりに尋ねた。

「ええ、大好きですよ。総介さんとは、同じ屋根の下で暮らしていますからねえ！」

「ええーっ！！！」

意外にあっさりと、衝撃発言をする美里亜に、涼音は驚いた！

何かと語弊があるが、要するに、美里亜所有のマンションの一室を総介が借りているというだけの話なのだ。

こうして、何気ない日常が、何事も無かったかの様に過ぎ去って行った…。

・ ・ ・ ・

鉄組による《定例総会》を三日後に控えた日の夜。

《奴等》が動いた…。

一台の黒いワンボックスカーが、漆黒の夜道を走り抜ける。

「間もなく、目標地点へ到着します」

運転手の男が、後部座席の男達に知らせた。

車内の男達は、運転手を含めて全部で六人。

全員、黒い作業服に黒いめざし帽、暗視スコープ内蔵のサングラスを着用している。

リーダー格の男が、作戦の細かい段取りを説明している。

彼等の正体は、泣く子も黙る…いや、泣くヤクザも黙る《K・Team》のメンバーである。

《K・Team》とは、鉄眞悟の懐刀・海堂勇が指揮する私設特殊工作部隊の名称だ。

拉致・暗殺・破壊テロ活動等の実行部隊として、鉄組に敵対する組織は勿論、自衛隊・警察・政治家に至るまで恐れられている存在である。

《K・Team》は、元々自衛隊出身の海堂が五人の部下達と共に結成したフリーランスの戦闘部隊であり、世界中の戦地を転々と来た。所謂、《戦闘のプロ集団》である。

「…作戦は以上だ。作戦開始と同時に時計を合わせる！」

《K・Team》が乗ったワンボックスカーは、大徳寺邸から一メートル程離れた路地裏脇に停車した。

丁度その時、海堂の携帯電話に非通知着信が入った。

『ミスター海堂、私だ。マスターだ』

虎ノ介の暗殺依頼を一方的に断っておいて、今更、何の用だろうか？

海堂は、不機嫌な態度で電話に出た。

「今、忙しい。手短に話せ」

『君に忠告だ。くれぐれも、《殺戮の天使》を起こさぬ様、気を付ける事だ』

マスターは、それだけ言うと電話を切った。

（何の事だ？何が言いたいのか？…しかし、今はそんな事を気にし

ている暇はない)

「作戦開始だ！」

・
・
・
・

虎ノ介は、珍しく仕事を早めに切り上げ、車で自宅へと向かっていた。勿論、総介も隣に同乗している。

「何だか、楽しそうですねえ」

後部座席で、鼻歌混じりのリズムをとる虎ノ介に、総介は尋ねた。

「当たり前だよ。四日振りに可愛い娘に会えるというのに、喜ばない親がどこにいる？」

相変わらずの親バカ振りだ。

車が駅前通りを過ぎた時だった。総介の携帯電話のバイブ音が車内に響いた。着信の相手は茉里華である。

『総介、何処にいる！？』

茉里華は切迫した様子だ。

彼女の話では、涼音の警護の為に大徳寺邸周辺に配置した捜査員達との連絡が、急に途絶えたのだという。

更に、聖理奈の携帯電話は、電波状況が悪くて繋がらないらしい。

『総介、すぐに社長宅へ向かってくれ！社長の警護は、私が引き継ぐ！…総介！？』

後部座席のシートに置かれたままの総介の携帯電話を虎ノ介は拾い上げた。

「警視さん。総介君なら、たった今、飛び出して行きましたよ」

総介は大徳寺邸へ、猛ダツシュで向かった！

【第八話了】

鉄組編 第九話

【第九話】

時刻は、既に二二時を過ぎていた。

涼音は自室に籠り、課題と悪戦苦闘中である。

聖理奈は応接間で、自らが代表を務める法律事務所の残務を整理中だ。

メイドは戸締まりの確認の為、屋敷内を巡回している。

執事は執務室で、執務に追われていた。

大徳寺邸内では、各々が普段と変わる事なく過ごしていた。

二二時二分。突如、屋敷内の明かりが消えた。

執事とメイドは、懐中電灯を片手に、地下の分電盤へ向かった。

・
・
・
・

『こちら《S》。目標宅のセキュリティシステム解除。管理システム完全掌握』

ワンボックスカーの運転手《S》は、警備会社のホストコンピューターをハッキングし、一時的に大徳寺邸のセキュリティシステムを切り離し、邸内の管理システムを掌握した後、再びセキュリティシステムを繋げた。

これにより、警備会社には、《一時的な停電》とだけ認識されるのである。

因みに、《K - t e a m》のメンバーは、苗字の頭文字を取って互いに呼び合っている。

『目標宅への電力供給停止及び全施設解除』

そして、邸内が停電状態となり、全てのドアが解錠された。

電力供給を断たれた大徳寺邸は、暗く静まり返っている。

一方、屋敷周辺の警護に当たっていた捜査員達は、それぞれの配置付近で倒れていた。

彼らの首筋には、先端が針状の《麻醉弾》が打ち込まれていた。

即効性の為、チクツと感じた瞬間に眠りへと落ちるのである。

『こちら《M》。目標宅周辺の捜査員全員の沈黙を確認』

更に、邸内への侵入に逸早く成功した《F》は、小型磁場発生装置を特定範囲内の周波数で作動させ、半径五メートル圏内での携帯電話の使用を不可能にした。

『こちら《F》。半径五メートル圏内磁場発生完了』

『こちら《K》。行動開始！』

《K》こと海堂の号令で、メンバーは音もなく一斉に侵入したのである。

・
・
・
・

執事とメイドの二人は、懐中電灯を手に持ち、地下室の分電盤を照らしていた。

執事は脚立に乗り、分電盤のブレーカーを上げ下げしている。

「おかしいなあ。ブレーカーが落ちた訳でもないし…」

ガチャ…

『こちら《S》。地下室出入り口ドアの施錠完了』

《S》が管理システムから地下室のドアをロックしたことにより、

執事とメイドは地下室に閉じ込められてしまった。

暗闇の中に一人で応接間に居る聖理奈は、携帯電話の液晶画面の明かりで室内を照らしていた。

携帯電話の電波状況は《圏外》と表示されている。

これは、ただの停電ではない事を直感した聖理奈は、壁に立て掛けてあるゴルフバッグの中からドライバーを一本取り出し、握り締めた。

ドアの外には、何やら人の気配がする…。

『こちら《J》。これより応接間へ侵入する』

《J》はドアノブをゆっくりと捻り、応接間へ入った…。

ガッツ…！

その時、《J》の後頭部に強い衝撃が走った！

聖理奈は、無我夢中でドライバーを何度も何度も振り下ろした！

そして、《J》の意識は朦朧としてきた…。

丁度その時、屋敷内を索敵中だった《F》が現れ、《J》の後頭部に振り下ろされるドライバーを片手で受け止めた。

「何をしている！？目標は二階だ！」

「す、すまん…」

《F》は懐からサイレンサー（消音器）内蔵の拳銃を取り出し、ドライバーを構える聖理奈に対して、何の躊躇もなく引き金を引いた。
パシュツ…！

聖理奈は発砲の衝撃によって、後ろへ退け反り尻餅をついてしまった。

そして、《J》と《F》は、すぐ様二階へと上がって行った。

「あいたた…。何よ、もう！」

聖理奈は、腹部に何か違和感を覚え、右手で擦さすってみた。

すると、ヌルツとした生暖かいモノを感じた。

「な、何よ、コレ…？」

・
・
・
・

「イヤッ…！！！」

二階から涼音の悲鳴と騒がしい物音が聞こえた。

聖理奈は、咄嗟に立ち上がると、二階の涼音の部屋へ駆け込んだ！

しかし、既に部屋の中は、もぬけの殻だった。

聖理奈がベランダに出て外を見回すと、薬か何かで眠らされた様子の涼音を二人の黒づくめの男達が、連れ去ろうとしていたのである。

更に、屋敷の外周に沿って、黒いワンボックスカーが正門前に向かって来ている！

聖理奈は、すぐ様一階へ下り、腹部への激痛を感じながらも、男達の先回りをした。

《S》は、ワンボックスカーを正門前に乗り付けると、左側のスライドドアを開け、中から《M》が降りて来た。

《M》はハッチドアを開けて三人を待った。

『こちら《D》。多少のイレギュラーはあったが、目標の確保に成功した。間もなく正門だ』

《S》は、管理システムから正門扉を自動制御で開放した。

重圧的な門扉が、ゆっくりと開く…。

扉の中から《D》と《F》と《J》が涼音を抱えて走り出て来た。

三人は、急いで涼音をハッチドアから車内に押し入れると、自分達も飛び乗り、車は急発進した。

二メートル程走ると、予め先回りをしていた聖理奈が、通用口から出て来るなり、走行中だったワンボックスカーのスライドドアにしがみ付いて乗り込んだのだ！

「何て女だ…！」

一同は、啞然とする。

「涼音ちゃんを返して！」

聖理奈が、涼音に手を伸ばそうとすると、運転手の《S》は蛇行しながら急に右へハンドルを切った！

聖理奈は、勢い余って車外に振り落とされそうになるが、辛うじて助手席のシートにしがみ付いたお陰で難を逃れた。

更に、《M》は聖理奈の体や頭部を蹴飛ばして落とそうとするが、聖理奈は頑として手を放さない！

「総ちゃんと約束したんだから…。絶対に涼音ちゃんを守るって！」
埒が明かないと判断した《K》は、拳銃を取り出すと、聖理奈の額に銃口を向けた。

「お嬢さん、悪いが此処で終わりだ…！」

この時、聖理奈は《死》を覚悟した。

(…総ちゃん、ごめんね。私…もうダメ…！)

《K》は引き金を引い…

その瞬間、赤い閃光が《K》の銃身を貫いた！

間一髪の所で総介が、ハンドレールガンで撃ち抜いたのだ！

聖理奈は手の力が抜けた所為で、ワンボックスカーから振り落とされてしまった！

総介は、聖理奈に駆け寄りながらも、走り去るワンボックスカー内から、こちらを見つめる《K》の姿を目で追った。

「聖理奈さん、しっかりして下さい！」

総介は、聖理奈を抱き抱えて必死に呼び掛けたが、聖理奈からの返事はなかった。

聖理奈の背中を押さえる手にヌルツとしたモノを感じた。

それは、血だった…。聖理奈の白いブラウスが真っ赤に染まっっている。

顔色も青褪^{あせ}め、体温も下がってきている。血の気が引いていくのが

判る。

その時、総介の頭の中でフラッシュバックが起きた！

総介は、かつてこれと同じ経験をした事があったのだ。

(リノア…)

それは、総介にとってトラウマとなる程の出来事であった。

「だ、誰かーッ！救急車を呼んで下さいーッ！…早くしないと、聖理奈さんが、聖理奈さんが…！誰かーッ！」

総介は、必死に叫び続けた。

夜の閑静な住宅街に、総介の悲痛な叫び声だけが響き渡る…。

・
・
・
・

聖理奈が病院に運ばれてから、既に二時間が過ぎようとしていた。

結局は、騒ぎを聞き付けた付近の住民が救急車を呼び、聖理奈は神崎グループが経営する某記念病院へ搬送されたのだ。

幸いギリギリの所で、失血によるショック症状だけは免れた様だ。

しかし、弾は腹部を貫通しており、腎臓の損傷が思った以上に酷く、

手術は困難を窮めたが、執刀医の懸命な処置の甲斐もあり、一二時間以上にも及んだ大手術は無事に成功した。

茉里華は大徳寺邸周辺の現場検証の為、病院に来る事は出来なかったが、美里亜と虎ノ介は大急ぎで駆け付けた。

総介は虎ノ介に、涼音が拉致された事を告げると、虎ノ介はその場に倒れ込み、嗚咽を漏らした。

そして、この記念病院の臨時医師でもある美里亜は、執刀医から詳しい事情を聞いた。

「命に別状はありませんが、傷が塞がるまでは絶対に安静だそうです。今日のところは、私が付き添います。総介さんは、帰って休んだ方が良いでしょう」

総介は美里亜に軽く会釈をすると、力無く出口へ歩き出した…。

「総介君！」

虎ノ介が駆け寄り、総介の前で立ち止まった。

そして両手両膝を床に着け、頭を下げた。

何と、虎ノ介は総介に対し、《土下座》の形をとったのだ！

「頼む、涼音を助けてくれ！頼む…！」

虎ノ介の眼には、涙が溢れ返っていた。

「す…すみません。ちょっと、外へ行つて来ます…」

もはや、心神喪失状態の総介は、力無くフラフラと俯うつむきながら病院を出た。

「総介さん…」

美里亜と虎ノ介は、今の総介には何一つ声を掛けてあげる事が出来なかつた…。

【第九話 了】

鉄組編 第一話

【第一話】

涼音は暗闇の中にいた。

何も見えない、何も聞こえない、漆黒と静寂の中。

ここは、涼音だけの世界。誰も入っては来られない、涼音一人だけの世界。

やがて、一筋の光が射し込む。

その光は次第に《手》の形となり、涼音の目の前で広がっている。

涼音は恐る恐る手を伸ばし、《光の手》を掴んだ。

何とも、暖かくて心地良い《手》だろうか？

握っているだけで、安心できる…。

「大丈夫ですか、涼音さん？助けに来ましたよ」

・
・

・
・
(夢…?)

(何で、あんな奴の夢なんか…)

涼音は周りを見渡した。どうやら、マンションの一室のようだ。

「痛ツ…！」

薬の効力がまだ切れていないせいか、頭がズキズキする。

取り敢えず、外へ出る為に玄関へ向かった。

しかし、ノブを回しても、鍵が掛かっっていてドアは開かない。

しかも、鍵は外側からしか開けられないタイプの様だ。

「どうして、こんな…」

涼音はドアに凭もたれ掛かった。

「アンタも、親の借金の肩代わりに連れて来られたのかい？」

涼音の目の前には、三十代半ばと思われる女が立っていた。

涼音は啞然とした。

「私は美香。アンタは？」

「涼音…です」

美香は、涼音の手を取って居間の方へ連れて行った。

— 豊分位ある居間には、他に二人の女性が座ってテレビを観ていた。

「二人共、新しい子が来たよ！…ほら、アンタも挨拶しなさい！」

「す、涼音です…」

涼音は軽く頭を下げた。

美香は、この状況を理解出来ない様子の涼音に対し、本人が置かれている説明を始めた。

この場所は、鉄興業本社ビル内のワンフロアであるという事。

同じ様な造りの部屋が、このフロア内には幾つも存在する事。

そして、同じ様な境遇の女達が他にも居るとい事。…等。

「ここに居る女達は、皆、親族が作った借金の肩代わりとして鉄組に連れられて来たんだよ」

そう言えば、シノブがその様な事を話していたのを思い出した。

「それじゃあ、お母…大徳寺早苗って人、知りませんか？」

涼音は、『母親がここに居るのではないか？』という期待感を胸に込め、尋ねた。

「ああ、その人なら…」

ガチャ…！

美香が答える間も無く玄関のドアが開き、金髪と茶髪の二人の若い男の組員が中に入って来た。

「お前か、海堂さん達に拉致られて来たっていう女は？」

金髪男は、涼音を品定めをする様に見入った。

「ふう〜ん、結構可愛いじゃん！」

金髪男は、そう言いながら涼音の頬を馴々しくなぞった。

「イヤッ！」

涼音は咄嗟に手を振り払うと、金髪男は逆上したのか、いきなり涼音を殴り倒してしまったのである！

「このガキ、ナメやがって！」

「オイ、よせ！」

倒れた涼音を執拗に蹴り飛ばそうとしている金髪男を茶髪男は、体を張って止めている。

「…まったく、遣いの一つもロクに出来ねえのか？」

「か、頭あ…！」

鉄眞悟が業を煮やして、上のフロアから下りて来たのだ。

眞悟は、頬を赤く腫らして床に倒れている涼音を見ると、金髪男を一睨みした。

「俺は、大徳寺の娘を連れて来いと言っただがなあ…！」

眞悟は胸元に手を入れた。

「か…頭、この女が先に俺の手を…」

パン！

その瞬間、眞悟は金髪男の頭を撃ち抜いた！

金髪男は側頭部から鮮血を吹き上げながら、涼音の目の前に崩れ落ちた。

「ひっ…！？」

涼音は声にならない悲鳴を上げた。

金髪男の頭から流れ出る大量の血が、灰色のカーペットに染み込む。

・
・
・
・

涼音は、最上階の眞悟のオフィスへ連れられて来ていた。

「お嬢ちゃん、ウチの若い者が手荒なマネをして悪かったな」

「……」

涼音は俯きながら、ジッとソファに座っている。

「人が死ぬところを見たのは、初めてか？」

眞悟は涼音の隣に座ると、涼音の後ろ髪を掻き上げ、首筋を唇で愛撫した……。

「……！」

眞吾のその行為に涼音は、ピクツ…と反応を示した。

「人間てのは、呆気ないモノだろ？」

次に眞悟は、涼音のTシャツの中に手を入れ、胸を弄り始めたので

ある。

「や…やめて…下さ…い…！」

涼音の身体は小刻みに震え出した！

「さつき、お前を殴った奴…。頭を撃ち抜いた途端にコロッと逝っちまうんだからなあ！」

眞悟の手は、涼音の内股を撫で始めた。そして徐々に…！

「イヤッ！」

涼音は眞悟の手を振り解いた！

「さすが母子だな…。良い感度だ。これなら、国松のロリコンじじいも大喜びだなあ！」

眞悟は、早苗の事を知っていた。このビルのどこかに監禁されているに違いない！涼音はそう思った。

「お、お母さんを…返して下さい…！」

涼音は身体を震わせながら、か細い声で懇願した。

「その女の事、マナブなら知ってるぜえ。…ってアイツ、確か死んだんだよなあ？ハーツハツハツハツ！」

高らかに笑う眞悟の背後で、涼音はソファに深く蹲うすくまり、身を丸くした。

(パパ…、私…もう…ダメ…！)

・ ・ ・ ・ ・

(助けて、総介…)

・ ・ ・ ・ ・

病院を出てから、どの位歩いたのか、本人にも分からない…。

目的も無いまま、黙々と歩き続ける総介だったが、気が付くと昨夜、聖理奈が倒れていた現場にいた。

既に、警察による現場検証も終わり、周囲は再び閑静な住宅街へと戻っていた。

ふと、総介は足下のアスファルトに目を向けた。

現場検証終了の際、警察によって消された筈の聖理奈の血痕が、未だ所々に残っている。

昨夜、この場所で聖理奈は、鉄組のワンボックスカーから振り落とされたのである。

駆け付けた総介が、聖理奈を抱き抱えた時のヌルツとした感触は、今でも手に残っている。

総介は手のひらをジーツと見つめた…。

ポツポツと当たる雨が、次第に強くなる。

「…聖理奈さん、本当に…すみません。僕が…もっと早く…来る事が出来たなら…」

(あの時も、こんな雨だった…)

総介の頭の中で、再びフラッシュバックが起きた。

・
・
・
・

雨が降り続けている…。周りは、瓦礫と死体の山…。

目の前には、瓦礫の中に埋もれた傷だらけの女性が、総介を見つめて微笑んでいる。

「くっ…、ごめんなさい、リノア…。僕がもっと強かったら…！」

赤毛の少女リノアは、涙ぐむ総介の頬を優しく撫でた。

「本当に…、泣き虫なんだから…、総介は…。男の子なら…、強くなりな…さい…」

・
・
・
・

(リノア…、また僕の所為で、大切な人を傷付けてしまいました…)

「…聖理奈が無事で良かった。お前のお陰だな、総介」

ずぶ濡れになった総介の背後から、茉里華が傘を開いて差し延べたのである。

暫くの間、雨音だけが二人の時を刻んだ…。

「…スコットランドヤード時代、毎週のように殉職者が出てな、上司がその都度、遺族へ報告するんだ」

茉里華が話し始めた。

茉里華は、《スコットランドヤード》での研修時代、管理者としてのノウハウを学ぶ為、日頃から上司に付いていたのであった。

殉職者の遺族への報告は、上司の役目でもあった。

「私は幾度となく、その場に居合わせ、上司の辛い心中を察したものだっただけだ」

上司の報告に対し、遺族が泣き崩れる様子を茉里華は、ただ黙って見ているしかなかったのだ。

「まさか、自分にその役目が回って来ようとは、今日まで思ってもいなかったよ…」

茉里華の表情が、急に暗くなった。

大徳寺邸の警護の為、周辺に配置していた捜査員の内の一人に、二発の麻酔弾が打ち込まれていたのである。

恐らく、一発では効かなかった為に、もう一発打ち込まれたのだろう。

その若い捜査員は、麻酔薬の多量摂取によるショックが原因で帰らぬ人となったのである。

「彼は、母親と二人暮らしでな…。母親に『息子を返せーッ!』っ

て泣き付かれたよ……」

茉莉華は傘を下ろし、総介の背中にコッソ……と額を付けた。

「辛い……辛かったよ、総介。……私はもう、あんな思いは、したくない。……これ以上、悲しむ者を……増やしたくはない。だから頼む。奴等を、鉄組を……」

.....

「……潰してくれ！」

.....

降り頻る雨が二人を濡らし続ける……。

【第一話】

鉄組編く第一話

【第一話】

涼音は、眞悟のオフィスから軟禁部屋へ戻って来てから、ずっと部屋の隅で塞ぎ込んでいた。

同室の二人は、見て見ぬ素振りだ。ここでは、『他人への干渉はない』というのが鉄則である。

いつ自分達の身に、危険が迫るとも知れない状況の中で、彼女達には、他人を気遣う余裕などないのだ。

借金の返済が不可能と判断された場合、臓器又は、身体を売って返済をする事しか、彼女達に残された道はない。

彼女達にあるのは、退屈な日常と、迫り来る死への恐怖だけだった。

美香は、そんな軟禁生活をもう三年近くも続けてきた。

最初は、母親の手術費用を補う為に、父親が借りた借金から始まった…。

事業の失敗により、破産した父親に対し、融資を引き受ける貸金業者は何処にもなかった。

唯一、鉄興業を除いては…。

鉄興業から融資を受ける際、『父親は自分に三万円
の生命保険を賭け、受取人は娘の美香名義とし、返済期間を三年』という契約を結んでしまったのである。

そして、今日がその返済期限日なのだ。

「大丈夫かい、涼音ちゃん？…こんな可愛い娘に、何て事をするんたろうね、あいつ等！」

美香は涼音の背中を擦ってあげた。

「…アイツは来る。必ず来てくれる…！」

涼音が小声で呟いた。

「アイツって…？」

涼音は、美香に総介の事を打ち明けた。

そして、ここへ連れられて来た経緯^{いきまつ}、母親の事も洗いざらい美香に話したのである。

「…アンタも、若いのに色々と苦労してるねえ。でも、アンタには総介さんという希望があるじゃないか！」

美香は涼音を励ます為に《嘘》をついてしまった。

ここに来た女達は、二度と生きて外へは出られない事を美香は知っていたのだ。

軟禁生活が長いと、そういう情報は嫌でも入って来るものだ。

涼音の母親・早苗もまた…。

ガチャ…！

組幹部と思われる男が、舎弟を連れて入って来た。

「おい、美香あ。お前の親父なあ…、死んだぜ！」

「…！」

一瞬、美香の身体を電気が走った！

今日の昼間、下町の小さなボロアパートの一室で、美香の父親が首を吊っているのを大家が見つけたのである。

遺体の側の小さなテーブルの上には、『スマナイ、美香』と書かれた遺書と三万円の生命保険証書が並べてあったという。

美香は、父親の死を嘆く一方、『晴れて自由の身になれるかも知れない』という期待感を心のどこかに募らせていた。

しかし、すぐにその僅かな《望み》は、粉々に打ち碎かれる事になる。

男の説明では、父親の保険金三万円が下りたとしても、借金・保険料・美香の三年間の食費等を差し引くと、不足分が出るというのだ。

「そ、そんな…！」

「約束通り、身体で払って貰うぜ！テメエの心臓一つで、借金が帳消しになるんだから、安いもんだろ？」

男が美香の腕を掴むと、美香はそれを振りほどき、部屋の中へ逃げ込んだ！

「いやだーッ！死にたくないッ！私は生きるんだーッ！」

美香は泣き叫びながら部屋中を逃げ回るが、すぐに男の舎弟に捕まってしまった。

それでも尚、必死に抵抗する美香に対し、二人の男は殴る蹴るの暴行を加え、彼女を袋叩きにしたのである。

大人しくなった美香を部屋の外へ連れ出そうとする二人に、涼音は美香の腕を掴んで引っ張った。

「お願い、美香さんを放してあげて！」

舎弟は涼音の手を払い解くと、床へ突き倒した。

男達二人は、やっとの思いで美香を部屋の外へ連れ出した。

「涼音…ちゃん…、アンタの…希望を信じなさい…。その人は…必ず…、来るから…」

パンツ…！

銃声が響いた。その瞬間、フロア内は静寂に包まれた。

うつ伏せになりながらも、未だ尚、手を伸ばし続ける涼音を尻目にドアはゆっくりと閉じていく…。

「美香さ…ん…」

涼音はその場で泣き崩れた。

「…これで分かったでしょ？」

同室の二人が、涼音の体を抱き抱えて起こした。

「私達もいずれ、あの人と同じ運命を辿るのよ…。ここにあるのは、退屈な日々と死の結末だけなの」

二人はそう言い残すと、居間へ戻り、再びテレビを観始めた。

（それでも私は…、信じてる…。アイツが来るのを…）

調査開始一四日目。

総介が、虎ノ介の依頼を受けて調査を開始してから、丁度二週間目の朝を迎えた。

《喫茶店ひだまり》が入るマンション二階の一室では、朝から総介がゴソゴソと何かを探していた。

「おかしいですねえ。確か、この辺に置いたはずですが…」

探し物が見つからず、困り果てる総介の後ろに、美里亜がいつの間にか立っていた。

「探し物って、コレですか？」

美里亜は二枚の円盤を手に持っていた。

正確に言うと、直径二センチ程のドーナツ型円盤の形状で、中心部を丸くくり貫いた部分には、十字の取手が付いており、円盤の外周は鋭い刃となっている代物である。

所謂、《えんげつりん円月輪》といわれる武器だ。

「何故、美里亜さんがそれを…？」

総介は恐る恐る尋ねた。

「たまには、メンテナンスをしておいた方が宜しいかと思ひまして」
美里亜はニツコリと微笑んだ。

総介は、そのドーナツ円盤型の武器をあまり他人に見られたくはなかつた。

何故なら、それは今まで数多くの人間の血を吸ってきたモノのだから…。

「これが無いと、お仕事に困るんですよね？」

美里亜は総介に円月輪を手渡した。

しかし、総介が手にした円月輪は、新品同様の輝きを保っていたのである。

「相当使い込んでいますね？ヒビやキズは補修しておきましたよ」

更に、美里亜が発明したという、軽くて強くて軟らかい新素材《チタニウム合金X》もコーティング済みだ。

もちろん《刃》も磨いてある。

「それと、もう一つ秘密兵器があるんですよ。じゃーん！」

美里亜は、黒のラメがかったジャケットを出して広げた。

当然、この生地にも《チタニウム合金X》が編み込んである。防弾チヨッキならぬ、防弾ジャケットだ。

「あ…ありがとうございます。美里亜さん」

美里亜は総介に着せてあげようと、総介の背後に回り、ジャケットの袖を広げた。

総介は恐縮しながら、袖を通した。すると…

美里亜は、総介の背後から腕を回し、静かに抱き締めた…。

「総介さん…、貴方にどの様な過去があったとしても、私達は貴方の事が大好きです。その事だけは、憶えておいて下さいね」

美里亜は、総介の首筋にキスをした…。

「…行つてらっしゃい」

「…行つて来ます」

総介は、美里亜の手を胸の辺りで握り返した。そして、ゆっくりと美里亜の腕を解き、静かに部屋を出た…。

「…あんなに広い背中だったなんて、今まで気が付きませんでしたよ。総介…」

・
・

・ ・
総介は、聖理奈が入院している記念病院へ足を運んだ。

そして、面会者の受付を済ませ、聖理奈の病室を訪れた。

病室へ入ると、花束や果物等が所狭しと置いてある。

昨夜は、見舞いの客でさぞかしごった返していたことだろうと、想像がつく。絶対安静の筈なのに…。

聖理奈は、窓際のベッドで寝息を立てていた…。

総介は、聖理奈の寝顔を覗き込んだ。顔に付いた擦り傷が痛々しい。

よく見ると、意外と可愛い寝顔だったりする。

総介は、聖理奈の寝顔を見つめたまま、幼い日の頃を思い出していた…。

三姉妹の中でも一番の泣き虫で、いつも総介の後を付いて来ていた一つ年下の女の子が、今では弁護士として第一線で活躍する程にもなったのだ。

窓の外からカーテンを揺らして、そよ風が入って来る。

総介は、窓から身を乗り出し、空を見上げた。

真っ青な空の中に、何かの広告を掲げた飛行船が、ゆっくりと飛んで行く。

総介は、心地良いそよ風を受けながら、東の間の平和な時間を身体で感じた。

「…さて、行きますか」

総介は聖理奈のベッドの横に立ち、深々と一礼した後、病室を出ようとした…。

「何も言わずに、行っちゃうんだ…?」

総介が振り返ると、聖理奈がジャケットの裾を掴んで、総介を睨んでいた。

「す…済みません。起こしてしまいましたか?」

「総ちゃんが来た時から、ずっと起きてたわよ!」

狸寝入りだ。

総介が、バツが悪そうにしていると、聖理奈は総介のジャケットを更に引っ張り、顔を近付けた。

「こんな時、どうすると良いか知ってる?」

「い…いえ」

「黙って…、キスをするの…」

聖理奈は、ちよつとはにかんで見せた。そして、ゆっくりと目を閉じた…。

チュツ…

総介は聖理奈の額に軽くキスをした。

(う…ん…、まあいいか…)

期待していたものとは少し違ったが、これでもかなりの進歩だ。

「総ちゃん。ちゃんと帰って来るのよ、約束だからね！」

聖理奈は小指を立てて、《指切り》の真似をして見せた。

「必ず、涼音さんを連れて戻って来ます！」

そう言うと、総介はニコツと微笑んで病室を後にした。

(ゾクッ…！)

聖理奈は一瞬、総介の笑顔の中に、得体の知れない何か《狂気じみたモノ》を感じたのである。

「気のせい…よね…？」

【第一話了】

鉄組編く第二二話

【第二二話】

午前九時 分。とある国際ホテルの一室にて…。

一組の男女がテーブルを挟んで、何やら打ち合わせ中である。

男の方は高級ブランドのスーツを着こなし、初老と呼ぶにはまだ若い
いが、落ち着きのある紳士だ。

そして、女の方は…。

「何故、この話をわざわざ私に…？ 茉里華ちゃん」

男は微笑んだ。

「警察内部に彼等との内通者がいます。それに、警察組織内で信用
の於ける人物と言えは、藤堂警視総監…貴方だけですから。叔父様」

藤堂警視総監は、茉里華達の父親の弟…、つまり、叔父にあたる人
物である。

因みに、《藤堂》は茉里華達の祖母方の姓である。

茉里華は鞆の中から、数十ページに綴ったリストを取り出し、藤堂へ手渡した。

「これは？」

「警察内部で、鉄組と癒着のある警察官及び職員のリストです」

茉里華は、鉄組への捜査が、いつも後手にまわっている事に疑問を抱き、以前から独自で内務調査を行なっていたのだ。

神崎グループに属する調査会社からセキュリティサービスに至るまで、あらゆる手の限りを尽くして出来たのが、このリストである。

鉄組と癒着のある警察関係者の数は、約四百人。何と、警察官を含む警視庁全職員の一割弱にも及ぶのだ。

情報漏洩により、捜査が後手にまわったのも、捜査妨害に遭ったのも、警察内部にこれだけの《敵》がいた所為だと納得せざるを得ない。

「…それで、君の眼から見て、その《公認スイーパー》の実力はどうなんだい？」

「実力は、私が保証します！」

茉里華は、自信を持って答えた。

「…分かった、検討してみよう」

藤堂は、茉里華が用意した資料の一つ、《甘井総介国際公認スイーパーに関する公式データ》に目を通していた。

そこには、《Eランク》の文字がはっきりと記載されていた。

・
・
・
・

都内有数のオフィス街。平日は、サラリーマンやOL達が所狭しと行き交う街だが、今日に限っては、人影すら見当らない。

大企業の本社ビルが軒を連ねる中、《黒い巨塔》の異名を持つ、鉄興業本社ビル内で、本日《定例総会》が行われるのである。

全国の鉄組系列の親分衆が、このビルに集結する事もあり、警視庁は、朝から半径二キロメートル圏内に於ける民間人及び、民間車両の侵入を禁止している。

但し、事前に送付されたIDカードを有する定例総会関係車両については、通行が許可されている。

各検問所では、警察官による厳しいチェックが行われている。

「これはこれは、警視庁のアイドル、神崎警視ではありませんか！」

茉里華に対し、ライバル心を燃やす警視・浅光は嫌味を言いながらのご登場だ。

「この現場は、私が指揮を執るので、部外者にうるつかれると大変迷惑なのですが…」

相変わらず、癩しやくに障る物言いである。しかし、茉里華は気にする様子もない。

「私にも、何か手伝わせて頂きたいのだが、宜しいか？」

「構いませんが、くれぐれも邪魔だけはしないで下さいよ」

(くくく…。私の完璧な指揮能力を目の当たりにして、せいぜい悔しがることだな。神崎茉里華！)

嫌な男だ…。

早速、茉里華は東の検問所がある第二ゲートへ向かった。

第二ゲートは、湾岸地区・千葉・埼玉・横浜方面からの車両が多く、四つのゲート中、通行車両の数が一番多い。

その所為か、警察官による車両チェックは比較的緩いのだ。

警察官は、車内及びエンジンルームとトランクルームを一通り確認し、サクサクと数をこなしていた。

その頃、第二ゲートの車列の中に、茉里華が用意した高級外車に乗った総介の姿があった。

総介の車が、ゲート到着まであと一台という時、誘導係の警察官の所に茉里華が歩み寄り、何やら話を始めた。

話の内容は聞き取れないが、男の捜査員が茉里華に何度も頭を下げ、恐縮している様子が見受けられた。

そして、男の捜査員は、茉里華に促される様に持ち場を離れたのである。

恐らく、後は自分に任せて、彼に休憩を取るようにとの指示を促したのだろう。

通常、ゲート通過の際の車両チェックは、三人一組で行われる。

一人が運転手のIDカードと車内を確認し、残りの二人はエンジンルームとトランクルームを調べる。

所要時間は、一台につき一分と掛からない。

今、前の車がゲートを通過した。いよいよ総介の番である。

携帯スキャナーを手にした茉里華が、近付いて来た。

「IDカードを確認します。後、トランクルームとエンジンルームを開けてください」

落ち着いた口調で指示を促す茉里華に総介は、予め彼女から貰った

IDカードを提示した。

後部座席の床に、円月輪の一部が見えていたが、茉里華は見ても振りだ。

茉里華は、IDカードをスキャンすると、カードと一緒にサングラスを手渡した。

トランクルームとエンジンルームを調べていた警察官が、『異常無し』を告げると、総介は車を発進させ、第二ゲートを通過したのである。

手筈通りだ。

これで総介は、誰にも怪しまれずに、『黒い巨塔』への侵入に成功したのであった。

後は、茉里華からの合図でスリーピング開始だ。

総介は待機する間、先程、茉里華から手渡されたサングラスを着けてみた。

『システム起動…』の文字が、半透明で映し出される。

『聞こえますか、総介さん？』

美里亜の声だ。

「み、美里亜さんですか！？このサングラスは…？」

『総介さんのお役に立てたらと思い、茉里華姉様に頼んでお渡ししたのですが…、ご迷惑でしたか？』

「いいえ、助かります。大事に使わせてもらいますよ！」

地下でも、通信感度は良好だ。

この鉄興業本社ビルは、神崎のグループ会社が設計から施工までを手掛けた為、設計図や設備等の資料を美里亜は簡単に手に入れる事が出来たのである。

更に、美里亜は同ビル内のセキュリティシステムにリンクして、監視カメラの映像チェックを可能にしたのだった。

『これから、総介さんがいる地下三階の見取り図を送りますね？』

総介の視界には、このフロアの見取り図が、半透明で映し出されている。

これに、生体感知システムのリアルタイムデータを重ね合わせると、このフロアのどこに人が居るかを瞬時に把握出来るのだ。

現在、このフロアには中心に青い点印が一つ確認出来る。それ以外に、赤い点印の表示がないので、このフロアには総介しか居ないという事が判る。

•
•

正午。鉄興業本社ビル三五階の大会議場では、全国から鉄組系列組織の長達が、一同に会する《定例総会》が始まるうとしていた。

まず、《裏経済界の首領》と呼ばれる国松十郎太くまつじゅうろうたがステージに上がり、開会の言葉を述べた。

『現在、日本経済は出口の見えない闇の中にある。しかし、それは《表社会》の経済に限っての事。実は、《裏社会》アンダーグラウンドの経済は、大変に潤っているのだ！』

つまり、不況が長く続くと、人々の心は荒みすき、麻薬・性・博打・暴力等のアングラ的な物に縋すがる傾向がある。

それは、諸外国でも同様であり、各国で起きている紛争や抗争の多くは、先の見えない不況が原因とされている。

鉄組との癒着の深い大手機械工業社は、秘密裏に武器の製造を行い、それを鉄興業を通じて世界各地の紛争地域へ輸出していたのである。

当然、鉄組は公的機関との癒着もあるので、ノーチエックで《商品》の輸出が可能なのだ。

『…以上の事から、今の日本経済を支えているのは、紛れもないアングラ経済である事を念頭に置き、今日の《定例総会》を成功させて頂きたい！』

場内は大喝采だ。

・ ・ ・ ・

『フーン！元日銀総裁が何を言うっ！』

ノートパソコンから美里亜のシステムにリンクし、今の国松の演説を聴いていた茉里華が、吐き捨てる様に言った。

美里亜は、自宅地下研究所のスーパーコンピューターから、鉄興業本社のビルホストコンピューターにアクセスし、一三三三台ある監視カメラの映像を一台一台チェックしていた。

「涼音さんは、いったいどこに居るのでしょねえ…？」

・ ・ ・ ・

演説を終えた国松は、ステージの袖に立つ眞吾の所へ歩み寄った。

「相変わらずの名演説振り、痛み入ります」

眞吾は、蒸しタオルを手渡すと、国松はそれを手に取り、顔を拭いた。

「会長、例のモノをご用意して御座います」

「年々、質が落ちている様だが…？」

「ご心配には及びません。今年は、極上モノです。万が一お気に召されなければ、昨年同様、処分なされても結構です」

そう言うと、眞吾は拳銃を国松に手渡した。

国松は、眞吾の側近に案内されながら、四階の《超VIPルーム》へと向かった…。

「ちゃんと、撮っておけよ。ジジイとガキの絡みは、マニアに高く売れるからなあ！」

眞吾は、不敵な笑みを浮かべ、国松の後ろ姿を見送った…。

国松は、眞吾の側近と共に、《超VIPルーム》の前に立った。

「それでは、心行く迄、お楽しみ下さい」

眞吾の側近は、その場を後にした。

国松は、期待に胸を膨らませながら、その重厚な扉をゆっくりと開けた…。

部屋の真ん中の大きな円形ベッドの上には、ひらひらピンクのロリ

―夕衣装に身を包んだ少女が座っている…。

【第二話了】

鉄組編く第一三話

【第一三話】

一二時三分。

日曜日の都心のオフィス街は人通りが少ない。

況してや、二人の警察官を動員し、半径二キロメートル圏内を完全封鎖した厳戒態勢の中では、人影すら見当たらない。

《黒い巨塔》こと、鉄興業本社ビル三五階の大会議場では、現在、一年に一度の《定例総会》が行われている真っ最中である。

同ビル四五階は、《警備管理管制センター》として使われており、このフロアからビル内全ての警備状況を管理している。

そして、このビルの警備を担当しているのは、海堂勇を責任者とする《K・Team》のメンバー達である。

海堂は、ビル内に設置された一三台の監視カメラの映像を入念にチェックしている。

「《S》、一六階の一三番カメラの画^えを出してくれ」

海堂は、一六階で不審者を発見した様だ。システムマネージャーの《S》は、指示通りに映像を出した。

モニターには、キョロキョロと周りを見回しながら、行ったり来たりを繰り返す男の姿が映っている。

「《S》、この男の身元を調べろ」

早速《S》は、男の画像解析から、富山県増田組の組員である事を割り出した。恐らく、トイレを探している内に迷い込んだのだろう。

「《J》、聞こえるか？一六階一三番カメラ付近の男を三階の待合室まで案内してやれ」

『「こちら《J》、了解した』』

海堂が的確な指示を出し、巡回中の部下達が確実に対処をする。

《K - Team》ならではの連携である。

そして、海堂は地下三階の駐車場で、僅かに動く人影を見逃さなかった。

「地下三階六番カメラ前の人影を確認しろ」

《S》は生体感知システムと併用して、海堂が地下三階で見掛けたという人影を探索した。

「人影を確認。画像解析終了。静岡県飯田会組員・西一にしはつると確認。I
Dカードも発行されていますが…」

海堂は、《S》が読み上げた解析結果に対し、どこか不満げである。

「《D》、地下三階六番カメラ付近にいる男を拘束しろ！」

(静岡には、飯田会という組は存在しない…)

『こちら《D》、了解した。五分で向かう』

《D》はすぐに地下三階へと向かった。

海堂はこの時、どことなく嫌な緊張感に襲われていたのであった…。

・
・
・
・

四階。《超VIPルーム》の扉を開けた国松の目の前には、ひらひらピンクのロリータ衣装に身を包んだ可愛らしい少女が、大きな丸いベッドの上に座っていた。

「名前は？」

「…涼音」

涼音は、俯いたまま答えた。

国松は、涼音の顎の辺りを指で撫でると、ゆっくりと顔を上げた。

涼音の身体は、小刻みに震えている。

「可愛いねえ、涼音ちゃん。怖がらなくてもいいんだよ。痛いのは最初だけだからね」

何たる、エロジジイか！

国松は、フリル付きのスカートの中に手を入れ、涼音の太ももを弄まさぐり始めた。

それでも涼音はジッと耐えている。

・
・
・
・

「今年の国松会長の生け贄は？…って、あの娘は、我々が確保した弁天屋物産の社長令嬢ではありませんか！？」

《S》が《超VIPルーム》内の監視カメラの録画状況をチェックしながら言った。

「確か、去年の娘は、『舌使いが下手だ！』とかで会長に撃たれたんだよなあ」

《M》が啜え煙草で、人差し指をこめかみに当てながら現れた。

「あゝあ、この娘も可哀相に……」

《M》は、モニターの中の涼音を見ながら、深い溜め息を吐いた。

「《D》からの連絡はまだか？」

《D》が地下へ下りてから、既に一分が経過していたのだ。

「あれ……？管理システムが、何者かによってハッキングを受けています。これより、システムファイルを……え？」

《S》が、ハッカー対策としてシステムファイルのプログラムを書き換えようと、ファイルへのアクセスを試みたが、システムから拒否されてしまったのだ。

それどころか、システムマネージャーであるはずの《S》のアカウントまでも消去されてしまったのである。

「か……完全に、乗っ取られてしまいました……」

「《D》、《F》、《J》、聞こえるか？大至急、管制センターへ戻れ！イレギュラーが発生した！」

海堂は、落胆のあまり、肩を落とす《S》を尻目に他のメンバーを呼び出した。

『こちら《J》、了解した』

『こちら《F》、了解した』

《D》からの返答がない。

海堂は何度も呼び掛けたが、《D》からの返答はなかった。

「何が、起きている…?」

海堂の眉間の皺しわに沿って、脂汗が流れ落ちる…。

・
・
・
・

『総介さ〜ん、聞こえますかあ? たった今、管理システムのハッキングに成功しましたので、これから涼音さんの所へ誘導しま〜す』

天才マッドサイエンティストの美里亜にとって、システムファイルのデータを丸ごと書き換える事など、造作もない事なのだ。

『あれ…? 総介さんの側に赤印が点いているのですが、誰か居るのですか?』

生体感知システムのセンサーに反応する赤印が、総介を示す青印の側で点滅している。

「ハハ…。ちょっとしたお客様です。用事は済みました」

総介はそう言いながら、《D》の両手両足を縛り、猿轡さるなまを噛ませ、車のトランクルームへ放り込んだ。

『総介、聞こえるか！？』

今度は茉里華だ。

『待たせたな。たった今、上から正式に《依頼要請》が下りたぞ！』
警視庁が、《国際公認スイーパー》の総介に対し、鉄興業本社ビルの《スイーピング許可》を出したのである。

『《国際公認スイーパー》甘井総介。警視庁より正式に依頼する。広域暴力団鉄組の壊滅作戦に、貴殿の力を貸して欲しい！』

茉里華はインカム越しでありながらも、深々と頭を下げた。

『ご依頼をお受け致します！』

そう言うと、総介は気絶中の《D》を残したまま、トランクルームのドアを閉めた。

『では、早速だが大徳寺涼音の救出に向かってくれ！』

『総介さん、急いで下さい！』

総介は、美里亜の誘導で、エレベーターに乗り、四階の《超VI

Pルーム》を目指した。

総介の両腰にぶら下げた円盤型の武器、《円月輪》の刃が、蛍光灯の光にチラチラと反射していた。

・
・
・
・

鉄興業本社ビル三五階の大会議場では、引き続き《定例総会》が行われている。

現在、鉄組系列関連会社及び団体等の前年度に於ける、収支決算報告書に沿った説明が行われていた。

そして、ドラッグ、恐喝、人身売買、児童ポルノ等の違法行為で得た収益が大半を占める為、この会合は《完全オフレコ》で行われる。従って、中の会話が外部に漏れる事は決してない。…筈だが、現在のビルの管理システムを美里亜が掌握しているので、中の会話は筒抜けである。

更には、警視庁中央管制センターのスーパーコンピューターを經由して、警察官専用一般回線と繋がっており、鉄組の悪事が警視庁の殆どの職員に知れ渡る事となったのだ。

「社長、お耳を…」

大会議場のステージ袖に座る眞吾の所へ海堂が小走りで近寄り、何やら耳打ちをした。

その瞬間、眞吾の表情は一変した。

「私は、少し席を外させて頂く。諸君等は、そのまま続けてくれ！」

眞吾はそう言い残すと、足早に会議室を出た。海堂も後を追った。

「管理システムが、乗っ取られただど！？公安か？それとも、どこかの組織の仕業か？」

「部下との連絡が途絶えました。侵入者の可能性も否定できません」

これでは、《定例総会》どころではない。

眞吾はあわよくば、総会内で弁天屋物産の経営権獲得を公表する予定だったが、予定外の邪魔者登場で、それも叶わなくなってしまったのだ。

「海堂、お前は侵入者の始末とシステムの奪還に努めろ！」

海堂は、この時既に《K・Team》主導でビル内の全組員に対し、侵入者の徹底排除命令を出していたのであった。

まず、エレベーターの電源を落とし、非常階段及び東側と西側階段の出入り口を手動切り替えて完全に封鎖をし、中央階段で侵入者を迎え撃つ作戦に出たのである。

・ ・ ・
『総介さん、おめでとございますう。二五階クリアです！』

涼音救出の為、エレベーターで四階を目指した総介だったが、海堂が電源を落とした事により、二階で降りる羽目になってしまったのである。

更に、中央階段以外の各出入口は手動切替えとなつた為、管理システムからの操作が不可能となり、総介自身も罠であると分かつてはいるものの、中央階段からの正面突破を決行せざるを得なくなつてしまったのだ。

生体感知システムの情報によると、二三階から三階までの各フロアで組員達が侵入者に備えて待機をしている様だ。

総介は、現在、二五階までの組員達をあっさりと伸^のしていた。

総介が、二六階へ辿り着いた瞬間、何か前髪を掠^{かす}めた！

背後のコンクリートの壁には、ライフル銃の弾丸がめり込んでいる。

総介は咄嗟に壁の陰に隠れたが、弾丸は壁を貫通して総介の頬を掠める！

フロア内は暗く、相手がどこから狙っているのか見当がつかない。

総介を暗闇の中から静かに狙うスナイパー（狙撃手）の正体は、《F》だった。

彼は《K・Team》メンバー随一の狙撃の名手だ。

今まで、彼が放った弾丸は、一体どれだけの標的の頭を貫通した事だろうか。

《F》は熱感知センサー内蔵暗視スコープを装着し、暗闇に紛れ、総介に狙いを定めた。

実を言うと、《F》は最初の一発目で仕留めるつもりだったが、標的が意外と勘が良く素早かった所為か、寸での所で仕留め損ねてしまったのだ。

（くっ、俺とした事が。腕が落ちたか？）

《F》は二度目の引き金を引いた。

ピシッ…！

また外れた。

《F》には、標的の姿がはっきりと見えている。例え、壁の陰に隠れていようとも、特殊合金製の弾丸で壁を貫通させて標的を撃ち抜く事さえ出来るのである。

しかし、当たらない。そして、彼はこう結論付けた。

(コイツ…、弾丸を避^よけているのか!?)

【第一三話〜了〜】

鉄組編 第一四話

【第一四話】

涼音救出の為、四階を目指す総介は、二六階で鉄組の破壊活動実行部隊《K・Team》のメンバーの一人、スナイパー（狙撃手）の《F》と相対していた。

（相手も、なかなか良い腕ですね。これでは、迂闊うかつに近付けませんねえ…）

総介は、暗闇の中から放たれる弾丸を躲かわすだけで精一杯だ。

生体感知システムのお陰で、スナイパーの大凡おおよその位置を把握しているが、敵も暗視スコープで、こちらの動きを把握している限り、間合いを詰められない総介が圧倒的に不利である。

「美里亜さん、聞こえますか？頼みがあるのですが…」

《F》は四度目の正直とばかりに、ライフルの照準を総介に合わせ、引き金に指を掛けた。

その瞬間、フロア内の照明が一斉に点灯した。

「しまっ…！」

暗視スコープを着けた《F》の視界を眼球が潰れる程の眩しい光が襲った。

「ど…どこだ!？」

目が眩み、うろたえながらも、銃を構える《F》の背後には、満面の笑みを浮かべた総介が立っていた…。

ガツツ…!

・
・
・
・

国松十郎太。元日本銀行総裁。現在は、大手経営コンサルタント会社最高顧問の肩書きを持つ。

そして、彼にはもう一つの顔がある。それは、裏社会に於ける経営コンサルタント（相談役）としての顔だ。

数年前、裏社会への法律による規制が一段と厳しくなり、裏社会の経済は表社会同様、不況の真っ直中にあつた。

彼は、表社会が不況に陥ると、人々はアングラ商品に縋^{すが}り付くという習性を利用して、裏社会の経済を立て直したのである。

《裏経済会の首領》と呼ばれる所以だ。

因みに、諸外国マフィアとの連携を保ち、情報を共有しながら、互いの利益を追及するといった《ヤクザビジネス》を提案したのも、国松であった。

そんな、齡七 を超える国松の楽しみの一つが、《少女との戯れの時間》である。

特に、ロリータと呼ばれる身体的に未成熟な少女を好み、彼女達の苦痛に歪む表情に対し、至福の悦びを感じるのだった。

国松は、毎年この部屋で眞吾が用意した《生け贄》を食しているのであった。

食された少女達は、その後、当然の様に《処分》されるのであった。

そして、今年の《生け贄》は大徳寺涼音だ。

国松は、涼音を包むピンク色の衣装の胸ボタンを一つずつ、丁寧に外していった。

すると、白く艶のある柔肌が露あきわになった。

お世辞にも、豊かとは言い難い胸の膨らみを小さなブラジャーが包んでいる。

国松は、その小さなブラジャーに指を掛けた。

「やめ…て」

涼音のか細い声に、国松は更に興奮度を上げた。

そして、フワフワのレースのスカートの中に手を入れ、柔らかな太ももを撫で回したのである。

時折、涼音の身体がピクツと反応する。

「口を開けてごらん」

涼音は口を閉じたまま、首を横に振った。

「さあ、口を開けるんだ！」

国松の口調が荒々しくなる。

それでも、涼音は頑かたくなに拒み続けた。

カチャ…

国松は先程、眞吾から手渡された銃を懐から取り出すと、涼音の口元に銃口を当てた。

「口を開けなさい、涼音ちゃん」

涼音は唇を震わせながら、ゆっくりと口を開けた。

国松はそのまま、銃口を涼音の口の中へ押し込み、銃身をゆっくり

と前後に動かし、それを繰り返した。

「いい子だ……」

涼音の大きな瞳から、大粒の涙が頬を伝わって落ちてきた。

（お父さん……、総……介……）

・
・
・
・

総介は、コンクリートの柱に《F》を括り付けた後、二七階を目指した。

『総介さん、待って下さい。奥の部屋に生体反応があります』

総介はフロア内を見渡したが、部屋どころか入口らしき扉さえも、見当たらない。

「中の様子はどうなっていますか？」

『その部屋には、監視カメラが設置されていないらしく、中の様子が分からないんですよ！』

総介は足下に違和感を感じ、探してみると、床下へ潜る為の蓋を見つけた。

多くのオフィスフロアは、床下に配線を張り巡らせている為、床を底上げしているのである。

総介は蓋を開けて、床下を覗いてみた。

どうやら、床下を通過して、隣の部屋へ行く事が出来る様だ。

『隠し通路ですねえ…』

美里亜は、総介のサングラスからの映像とビルの見取り図とを照らし合わせた。

床底には、何かを引き摺った跡と血痕と思われる付着物が付いていた。

総介は床下に潜り、隣の部屋の床蓋に手を掛け、ゆっくりと押し開けた。

その瞬間、モワツとした生暖かい空気と共に鼻を劈く悪臭が総介を取り巻いたのである。

部屋の中は真っ暗だ。総介は手探りで裸電球を手に取り、スイッチを入れた。

「…!!!」

総介と美里亜は、この世の地獄と呼ぶに相応しい光景を目にした。

部屋の真ん中には、大量の血液が染み込んだ拘束具付きの手術台が

置いてある。

壁には、有りとあらゆる《拷問器具》が掛けられており、血しぶきと思われる跡がくつきりと残っていた。

更に、床一面にも大量の血痕が広がり、所々でヌルツとした感触が足に伝わる。

この部屋で何が行われていたのか、考える余地もない…。

『こんな事って…。う…』

美里亜は、被害者の悲鳴が聞こえてくる様な感覚に襲われ、思わず口を押さえてしまった。

「誰か…いるの…かい？」

総介の足下から、力のない掠れた声が聞こえた。

そこには、虚ろな目で天井を見上げる美香が、全裸で腹から血を流しながら横たわっていたのである。

彼女の爪は剥され、手の指の関節は反対に折り曲げられ、紫色に腫れ上がった顔面は変形する程に殴られていた。

更に、身体中は血と痣色あざに染まり、性器も爛ただれて、長い時間に渡り、激しい暴行を受けたと思われる。

その上、銃で腹を撃たれていた。

『総介さん、この方はもう…』

美里亜は、医者立場から見ても、彼女には手の施し様がない事を総介に伝えた。

「安心して下さい。助けに来ましたよ」

総介が優しく手を差し延べる。

「アンタ…、そ…総介さん…だろ？本当に…来たんだね…。涼音ちゃんの…言った…通りだ」

美香は折れ曲がった指で、総介の手をなぞった。

「涼音さんの事、ご存じなのですか？」

「あの子は…、アンタが助けに…来るって…、信じて…たんだよ。早く…行ってあげ…な」

美香は、そう言い残すと、ゆっくりと瞼を閉じた。

「お父ちゃん…、お母ちゃん、また…三人で、暮らそ…ね…」

そして、美香は静かに息を引き取った…。

「…」

総介は、美香の亡骸に向かって深く頭を下げた。

「美里亜さん。先を急ぎましょう。道案内をよろしくお願いします」

『はい…』

美里亜は総介に対し、何故か今、違和感を感じた。

それが一体何なのかは分からない。口調も相変わらず穏やかだ。

総介が、この女性の死に対して、少しは感情的になるかと思っただが、意外にあっさりとした様子なので、逆に拍子抜けした程だ。

しかし、美里亜が感じた違和感は、決して思い過ごしではなかった。

この時、既に総介からは、《笑顔》というリミッターが取り外されていたのであった…。

・
・
・
・

警視・浅光五郎の表情は青褪めていた。

鉄興業本社ビル三五階大会議室で行われている《定例総会》の様子が、音声のみとはいえ、警察専用一般回線を通じて、PEPT（警察官専用携帯端末）に流されているのであった。

PEPTは、警察官と職員全員に支給されている為、少なくとも警視庁管内全域に広まっているに違いない。

「おや、浅光警視。顔色が悪い様だが、何か心配事でも？」

同僚想いの茉里華が、心配する。…素振りを見せた。

「な、何でもない。神崎警視は、自分の持ち場へ戻りなさい。指揮官の私に従いなさい！」

ムキになる浅光に対し、茉里華は薄笑いを浮かべた。

「失敬な！何を笑って…」

ピーピーピー…

突如、PEPTの緊急呼び出しアラームが、あちらこちらで一斉に鳴り出した！

PEPTの液晶画面には、以下の内容文が表示されていた。

『本日、一四時 分を以て、本件の捜査指揮権を浅光五郎警視から神崎茉里華警視へ移行する。各捜査員は、神崎警視の命令に従え。』

しかも最後には、《藤堂俊介警視総監》の署名まで付いている。

「何ッ！？」

この令状に面を食らったのは、浅光だ。

彼はこの数時間、茉里華より優位に立てた事で、この上ない優越感に浸っていたのだ。

《天国から地獄》とは、正にこの事だろう。

浅光にはこの後、更なる地獄が待ち受けているのであった…。

茉里華は、PEPTを《マイク・一斉送信モード》に切り替え、口元へ運んだ。

『私は、警視庁広域犯罪対策本部の神崎警視だ。只今を以て、広域指定暴力団・鉄組に対する壊滅作戦を実行する！』

その直後、地鳴りと轟音を響かせながら、数十台の大型装甲バスがビルの周りを取り囲んだのである。

バスの中からは、武装機動隊が姿を現し、瞬く間に鉄組包囲網が完成したのであった。

その光景を目にした浅光は、茉里華に怒鳴り声を上げた。

「神崎警視。鉄組壊滅作戦なんて、聞いてないぞ！」

「当たり前だ。お前ら《癒着組》には、秘密にしていたからな！」

「な…！？」

浅光は血相を変えて逃げ出そうとしたが、その前を茱里華が立ち塞いだ。

そして、側に居た二人の警察官に、浅光の確保を命じたのである。

「は…放せ！私が何をしたと!？」

「背任罪、横領、恐喝、殺人未遂及び、殺人幫助…。どれがいい？」
そう言つて、茱里華は、浅光の内ポケットから携帯電話を取り出した。

「あと、身分詐称もな？」

その携帯電話は、浅光が鉄組との連絡用に偽名で契約した物だった。浅光は観念したのか、警察官に支えられるも、その場へたり込んでしまった。

その頃、全国各地では、それぞれの県警本部が主体となり、鉄組関連組織・団体・企業に対し、大規模な《ガサ入れ》が行われ、逮捕者が続出したのであった。

もはや鉄組は、その本体のみを残して壊滅の危機に瀕していた…。

鉄組編く第一五話

【第一五話】

とある記念病院の一室。聖理奈は、病室で一人、テレビを眺めていた。

午後三時ともなると、ドラマの再放送かワイドショー番組が定番である。

テレビの画面には、芸能レポーターが、アイドル歌手のスキャンダルについて熱く語っている。

聖理奈は溜め息を吐いた。

絶対安静とは言え、一日中、病室に籠りっ放しでは、気が滅入ってしまう。

眠るにしても、目を閉じると総介の事が気になって、余計に目が冴えてしまう。

聖理奈は、鉄興業本社ビルが建つ方角に顔を向けた。飛行船が、呑気に飛んでいる。

「総ちゃん、無事かな…」

聖理奈は何気なく、テレビに目を向けた。

ワイドショー番組を放送しているスタジオが、何やら騒ついている。スタッフが男性司会者の所へ駆け寄り、原稿を手渡している様子が映っている。

その原稿を黙読した司会者は、『えっ!?!』と、思わず声を漏らしてしまった。

『た…只今、入ったニュースです。警視庁は、先程、広域指定暴力団鉄組に対し、壊滅作戦の実行を宣言致しました!』

聖理奈は、枕元のリモコンを手に取り、ボリウムを上げた。

司会者がコメンテーターに意見を求めたが、このような事は前代未聞とばかりに、首を捻っている。

暫くして、アシスタントの女性アナウンサーが、現在、鉄組の関係者と名乗る人物と電話が繋がっている事を伝えた。

ここは、生放送の番組らしく、現場の生の様子を聞き出さない手はない。運が良ければ、『独占スクープ獲得』というテレビ局側の思惑があったに違いない。

『もしもし、鉄組の関係者を名乗るあなたに質問しますが…』

『誰でもいいから助けてくれ！奴を何とかしてくれ！…うわあああ
あー！ブツツ…ツーツーツー…』

通話が途切れた。

スタジオ内は沈黙に包まれた…。

聖理奈は、まさかと思い、美里亜の携帯に電話を掛けた。

呼び出し音が鳴っているにも拘らず、美里亜はなかなか出ない。

美里亜の携帯電話は、《留守番設定》にされておらず、呼び出し音は、ひたすら鳴り続けている。

聖理奈が諦め掛けたその時、ようやく美里亜が電話に出た。

「あ、美里姉。今、テレビを観たけど、そっちはどうなってるの？」

『…』

「涼音ちゃんは無事？総ちゃんは？」

『…』

美里亜からの返答がない。

「美里姉…？」

『…総介さんが、本気になってしまいました』

それだけ言うと、美里は電話を切ってしまった。

「美里姉。本気って…、何よ？」

・
・
・
・

聖理奈からの電話を一方的に切ってしまった美里亜は、携帯電話を置くと、深い溜め息を吐いた。

「聖理奈さんには見せられませんね。総介さんが、人を切り刻む姿なんて…。しかも…」

モニターの中の総介は、笑っていた。

いつもの《微笑み》とは違い、子供の様に無邪気で純粹に、この時を楽しんでいる純真無垢な笑顔。美里亜はそう感じた。

（そう…、この事だったのですねえ）

美里亜は四年前、総介が帰国して間もない頃、茉里華が美里亜と聖理奈の二人に話した事を思い出した。

「総介とお前達とは、棲む世界が違うのだから、必要以上に馴れ合うな。恋心など、以ての外だ！」

初めは、身分の違いや貧富の差などと思っていた美里亜だったが、実はそんな事ではなく、自分達と総介では、根本的に歩んで来た道が違うのだと思い知らされた。

華やかな表舞台を歩んで来た自分達とは違い、戦いに明け暮れ、常に死と隣り合わせの日々を過ごして来たであろう総介との溝が、そう簡単に埋まる筈がない事を茉里華は知っていたのだろう。

茉里華と美里亜は総介に対し、心惹かれるモノを持つてはいるが、それは恋愛感情とは別モノである。

しかし、聖理奈は違う。彼女の総介に対する気持ちは、純粋な恋愛感情だ。

幼い頃から、誰よりも総介を一途に想い続けてきた聖理奈に対し、美里亜は姉として黙って見守るべきなのだろうか。

美里亜は、モニターの中で殺戮を繰り返す総介の姿を黙って見つめていた…。

『美里亜、総介はどこまで上った？』

武装機動隊による突入のタイミングを見計らっていた茉里華が、総介の動向を尋ねてきた。

「…」

『おい、美里亜。聞いているのか！？』

モニターに見入る美里亜は正に、《心、此所に在らず》である。

『美里亜、応答しろ！』

「は…はい、すみません…。総介さんは、現在、三階をクリアしました」

心、此所になくとも、現在の状況を的確に伝える美里亜は、やはり凄い。

『…何かあったのか？』

「…いえ、大丈夫ですよ。幹部以外の皆さんは、大方片付きました」
茉里華の心配を余所よそに、美里亜は平静を装ったが、茉里華は怪訝そうである。

『美里亜さん、涼音さんの状況はどうですか？』

今度は、総介からの通信だ。

美里亜は、四階《超VIPルーム》内の映像を確認した。

「未だ、《行為》には至っておりませんが、涼音さんの貞操に危機が迫っている事には変わりありません。急いで下さい！」

涼音にとっては、危機的状況である。

『美里亜さん、生体感知システムの三階から四階迄のトレーシ

ングデータを送って下さい』

総介は三階から四階迄を抜粋した生体感知システムのリアルタイムデータを重ね合わせ、生命体を表すそれらの赤印を一つの平面上に置いたデータを要求した。

美里亜は、言われた通り、トレースデータを送った。

総介は、サングラスに半透明で映し出されるトレースデータと自分の現在地点を見比べながら、フロア内を移動した。

そして、立ち位置を定め、大きく深呼吸をすると、ハンドレールガンを真上に向け、引き金に指を掛けた。

美里亜は、その様子をモニターからジッと見つめている。

「…まさか、この人!？」

美里亜のその《まさか》が的中するまでに、そう時間は掛からなかった。

『…美里亜さん、四階の二つの赤印。どちらが涼音さんですか?』

•
•
•
•

「涼音ちゃんは、本当に良い子だねえ」

国松は、涼音に銃身を啜えさせ、身体中を弄りながら、自らの興奮度を上げていった。

アルミ製の銃身は涼音の唾液によって、黒光りしていた。

そして、自らの下半身を露にし、長たく反った自慢の男性器を涼音の口元に近付けたのである。

「さあ、啜えてごらん」

「…いやです」

国松は、それを拒む涼音の額に銃口を向けた。

涼音は、恐怖と絶望に泣き震えながら、国松の男性器に、その柔らかなく小さな唇をゆつくりと近付けた…。

その瞬間、涼音の目の前を赤い閃光が過ぎった。

赤い閃光により目が眩んだ涼音は、瞼を押さえながら、その場に屈み込んでしまった。

その直後、断末魔とも言える国松の叫び声が室内に響き渡ったのである。

何と、国松が持つ銃の銃身と共に、自慢の《男の象徴》が赤い閃光

によって、断ち切られてしまったのだ！

更に、国松の足下から無数の閃光が矢の如く身体を掠めながら天井へ突き抜けて行った。

「ひゃふ…、ひゃは…」

国松の精神的動揺は凄まじく、錯乱状態にあると言っても過言ではない。

国松十郎太は、完全に壊れてしまった…。

・
・
・
・

「む…」

「どうかしましたか、《K》？」

海堂は、大徳寺邸襲撃の際、《マスター》と呼ばれる外国人スナイパーから、ある忠告を受けていた事をふと思い出し、管理システムの復旧に奮闘していた《S》にその事を話した。

「…それで、何て忠告を受けたんです？」

「確か…、『殺戮の天使を起こすな』だったか…」

「…！」

キーボードを叩く《S》の指の動きが止まった。

それと同時に《S》の表情が、見る見る内に青褪^{あせ}めていく。

「何か、思い当たる節でもあるのか？」

海堂が尋ねた。

「《K》…海堂さんは、侵入者が、その《殺戮の天使》という人物だと思いですか？」

「さあな…。奴の忠告とやらが、気になったただけだ」

（《マスター》と呼ばれる男の詳しい経歴は不明だが、自分達と同じ傭兵上がりだと聞いた事がある）

傭兵やテロリストの間で、《殺戮の天使》の異名を持つ者と言えば、《S》には一人しか思い浮かばなかった。

（神話の時代、神に仇なす者を徹底的に打ち砕く、《殺戮の悪夢》とも呼ばれた天使…）

・
・
・
・

《J》と《M》は、三五階の大会議場前で、正体不明の侵入者に備えて守りを固めていた。

先程まで、中央階段の階下から聞こえていた阿鼻叫喚の叫び声も、今では静寂さを取り戻している。

そんな中、階段を一段ずつ、ゆっくりと上る足音が聞こえて来た。

『こちら《K》だ。《J》と《M》、聞こえるか！？』

二人は階段を中心にV字となる様、両端に場所を取り、銃を構えた。

『侵入者の正体が判明した！』

侵入者と思われる足音が、徐々に近付いて来る。二人は引き金に指を掛けた…。

『こちらの情報に間違いがなければ、奴の正体は…』

階段を上る侵入者の姿が見えると同時に、《J》と《M》は問答無用で引き金を引いた。

『《殺戮の天使》の異名を持つ…』

二人が放った弾丸は、高い金属音と共に侵入者の手前で弾け飛んだ。

『かつて、《カマエル》と呼ばれた《デリーター》だ！』

間髪を容れず、二発目を撃ち込もうとする《J》と《M》の目の前を銃を握った自らの手首だけが、舞い上がっていた。

『二人共、すぐに撤退しろ！』

二人はそれを呆然と見つめ、後頭部に激しい衝撃を感じた瞬間、それぞれが崩れる様に倒れ落ちた。

『奴は、俺達が単独で敵う相手ではない。早く逃げろ！』

総介は血塗れの円月輪を拾うと、ハンカチで丁寧に拭き取った。

『二人共、応答しろ！』

もはや海堂の声は、二人には聞こえない…。

【第一五話了】

鉄組編 第一六話

【第一六話】

突然、眞吾の携帯電話が鳴り出した。

眞吾は一瞬びくつくも、一度深呼吸をした後、携帯電話を手にとった。

液晶画面には、《浅光》の名が表示されていた。

「浅光！一体どうなってる！？警察は、何をしてるんだ！」

眞吾は、電話に出るなり、大声で怒鳴り散らした。

『…やはり繋がっていたか』

「誰だ？」

眞吾は、この女の声に聞き覚えがあった。

『忘れたか、私の声を？…まあ良いさ。ところで、貴様の腹心の浅光は、逮捕されたぞ』

眞吾は思い出した。この声の主は、彼が手掛ける《ヤクザビジネス

《を尽く潰つぶしてきた張本人であり、天敵と言いうべき女、《神崎茉里華》の声である事を！

「…神崎茉里華。これは、お前の仕業だったのか!？」

『さあな。これから、武装機動隊が突入する。悪い事は言わん。速やかに投降しろ』

武装機動隊と言いえば、犯罪抑止を目的とした警察の軍隊と言いつても良い程の集団だ。

そんなモノを投入するという事は、警察が鉄組と本気で戦争をするという意味だと、眞吾は捉えたのである。

「上等だあ！神崎茉里華あ。こうなったら、鉄連合と警察の全面戦争じゃあ！覚悟しとけよ、神崎茉里華あ！」

眞吾の頭の中は、戦争モードに突入した。しかし、彼は未だ全国の関連組織が、既に当局によって摘発を受けている事実を知らなかったのである。

当然、《殺戮の天使》についても…。

『一分だけ猶予をやる。気が変わったら、連絡しろ』

茉里華は、最後に慈悲の言葉を残して電話を切った。

鉄眞吾については、最高裁の即日判決により、《死刑》が既に確定していた。

つまり、現場に於いて、『速やかに刑を執行せよ』という意味でもある。

但し、現場の指揮官（警部以上の階級に限る）の配慮次第では、刑の執行を延期する事が出来る。

場合によっては、最高裁で《再吟味》となるが、余程の事がない限りは減刑になる事はない。

眞吾は今更、警察や茉里華の恩赦に報いようなどという気は、全く持っていなかった。

彼は、本気で警察との戦争を考えていたのである。

眞吾が大会議場へ戻ると、親分衆が一斉に詰め寄って来た。

「鉄総帥、一体どうなっているんだ？このビルを武装機動隊が包囲しているというが…」

親分衆の一人が携帯テレビの画面を眞吾に見せた。

「眞吾君、ボディガードとの連絡が着かないのだが…」

「鉄さん、何がどうなっているのか、説明してもらおうか？」

眞吾に対して、状況説明を求める声が、あちらこちらの親分衆から上がっている。

眞吾は、それらを「やれやれ…」と言わんばかりの表情で懐から拳銃を取り出し、天井に向けて発砲した。

室内は一瞬にして静まり返った。

「諸君、これより我々は、警察と全面戦争に突入する！」

室内は騒然となった。

「ち…ちよつと待ってくれ！そんな、急に言われても…」

一発の銃声が鳴り響いた。

親分の一人が、頭から血を流しながら、その場に倒れた。

眞吾が手にする拳銃の銃口から煙が漂っている。

「諸君らは皆、このまま警察の手に落ちたとしても、極刑は免れないであろう。だが、我々にはまだ、警察に対抗し得るだけの戦力を握っている」

眞吾の演説に熱が籠る。

その時だった。ドアをノックする音が聞こえた。

「誰だ？」

眞吾は銃口をドアへ向けた。それを見た親分衆もまた、拳銃を取り出し、ドアの方へ向けて構えた。

重厚なドアがゆっくりと開き、見知らぬ男がヒョコツと顔を出した。

「どうも、《公認スイーパー》です」

余りにも、緊張感のかけらもない男の出現に、一同は啞然とした。

「警視庁の御依頼で、このビルの《スイーピング》に参りました」

その直後、眞吾は引き金を引いた。

総介は首を傾け、弾丸を躲した。

「な…バカな！」

確かにその通りだ。射撃を得意とする眞吾にとって、三メートル程度の距離で標的を撃ち抜く事くらいは、造作もないのである。

しかし、この《公認スイーパー》は、いとも簡単にそれを躲したのであった。

親分衆は、一斉に引き金を引いた。総介は咄嗟に頭を引っ込めて、一度ドアを閉めた。

親分衆による一斉射撃が、弾切れになるまで暫くの間、続いた。

防音・防火・防弾対策が施してあるドアは、表面上、穴だらけの蜂の巣状態だが、貫通にまで至った様子はない。

再びドアがゆっくりと開いた。と、同時に総介が素早く部屋の中へ入り込み、手前の二人の手首を拳銃もろとも切り落とした！

更に総介は、二つの円月輪を巧みに操り、飛び交う銃弾を掻い潜りながら、親分衆の手首や腱、脊髄等を断ち切って行った！

場内は、文字通り《血の海》と化し、親分衆の叫び声が辺りに響き渡った。

・
・
・
・

茉里華は腕時計で、約束の一分を過ぎた事を確認すると、武装機動隊に鉄興業本社ビルへの突入指示を出したのである。

「武装機動隊各員に告げる。突入せよ！」

茉里華の一言で、ビルを包囲していた二名の武装機動隊員は、一斉に全ての入口を破壊し、ビル内への突入を決行した。

そして間もなく、茉里華の元に地下駐車場へ突入した隊員からの一報が届いた。

『地下三階、駐車車両のトランク内から、手足を縛られた男を発見。照合の結果、破壊活動実行部隊《K-team》メンバー、大東修だいたうあさむ』

と判明。身柄を確保した。以上』

破壊活動実行部隊《K - t e a m》は、国際A級テログループとして、警察も兼ねてからマークをしていた。

世界中の賞金首に関する情報等を取り扱う、国際懸賞機関（I P O）の評価では、ランクBに挙げられている程である。

「いきなり、大物をツブしていたとは……。さすがだな、総介」

茉里華の口元が緩む。

茉里華は、武装機動隊の後に続いて、ビル内へ入って行った。

・
・
・
・

「クソツ、何だっただんだ!？」

眞吾は総介に向かって、何発もの銃弾を放ったが、総介が円月輪を盾代わりに翳^{かざ}し、全ての銃弾を弾き飛ばしたのであった。

場内は、大量の血と熱気の所為か、赤く霧掛かっていた。

眞吾は、親分衆を血に染めながら迫り来る《公認スーパー》に対し、少なからずの恐怖を感じていた。

「クソツ、この俺があんな奴にビビってるのか!？」

眞吾は、拳銃を握った震える手をもつ片方の手で押さえ込んだ。

「社長、こちらへ」

背後から海堂が眞吾の手を取り、隣の部屋へ引き入れた。

「クソツ、クソツ、クソツ！海堂、奴は何者だ？」

「彼はかつて、《殺戮の天使カマエル》と呼ばれた、^{デリーター}元です」

眞吾は首を傾げた。世界中の裏社会の情報をリークしている筈の眞吾だが、未だかつて、《デリーター》等という者の存在を聞いた事がなかったのである。

かつて、世界中の戦地を渡り歩いた海堂もまた、風の噂で耳にした程度で、その存在の真偽については知る由もなかった。

六年前のあの日まで……。

・
・
・
・

今尚、人種間での争いが絶えない《南アフリカ共和国》。

白人至上主義を唱えるアレキサンドル・ラザ大統領率いる《政府軍》と人種融和政策を提唱する革命家・エクス・レイ率いる《非政府軍》との間で紛争が続いていた。

しかし、それら二つの勢力は、それぞれに二つの大国の後ろ盾があったのである。

政府軍には米国、非政府軍には中国が付き、《南ア紛争》は二国間の《代理戦争》へと発展していった。

そんな中、海堂達《K・team》は、中国側からの要請で、非政府軍に参加する事となったのである。

元々、エクス・レイは軍閥出身で、国軍の実権を事実上掌握しており、国軍は非政府軍に付く形となった。

対する、国軍を寝取られた側の政府軍は、民間人や傭兵が主体となった所謂、寄せ集めの軍隊でしかなく、その兵力の差は誰が見ても歴然であった。

国内外の誰もが、非政府軍の勝利を確信した、その日…。

非政府軍の本拠地・プレトリア基地が、僅か数名からなる特殊部隊の奇襲により、壊滅したのである。

幸いこの日、《K・team》は物資補給の為、基地を離れており、辛くも難を逃れていた。

海堂らは、基地からの緊急通信を受けて、急いで駆け付けたものの、プレトリア基地は基地としての機能を既に失われていたのである。

非政府軍の本拠地として、常に数百人の職員や兵士で賑わっていた筈のプレトリア基地には人影もなく、閑散としていた。

海堂達は基地内を探索した。

基地内は凄惨たるものだった。通路や階段、出入り口付近には、兵士や職員の死体が転がり、その殆どが鋭利な刃物によって、首や手首を切り落とされていたのであった。

死体は、ブロック毎に殺害方法が異なる事から、敵はそれぞれが特異な武器を装備していると認識出来た。

一通り探索を終えた海堂は、《統合作戦指令室》へ辿り着いた。

ここでは、各部隊への作戦命令を一手に行っている。言わば、非政府軍の頭脳と言える場所である。

海堂は拳銃を握り、中を覗いて見た。

そこには、一人以上のオペレーターや警備兵の《死体の山》が、文字通りに積み重ねられていた。

そして、その頂上には、エクス・レイの頭部が置かれていたのだ。

海堂は驚愕の余り、声が出なかった。

すると、どこからともなく歌声が聞こえて来たのである。

それは海堂にとって懐かしく、馴染みのある歌だった。

かつて、《スキヤキ・ソング》として、世界中に広まった日本の代表曲《上を向いて〇こう》だった。

その呟く様な歌声の主は、死体の山の中腹付近に立っていた。一四五才位の少年だった。

彼は両腰に、真っ赤に染まった円月輪をぶら下げていた。

海堂は、この死体の山を作った張本人が、あの《上を いて歩こう》を流暢な日本語で歌う少年なのだと確信した。

少年は、海堂の気配に気付いたらしく、ゆっくりと《山》を下りて来た。

海堂は恐怖の余り、足下が震え、身動きをとる事が出来なかった。まるで、《蛇に睨まれた蛙》である。

「おーい、カマエル。行くぞー！」

仲間の呼び声で、少年は、その場を立ち去った。

「…見逃して、くれたのか？」

海堂はその場へたり込み、暫く立ち上がる事が出来なかった…。

【第一六話了】

鉄組編 第一七話

【第一七話】

『こちら一二班。現在二二階に到着した。大至急、医療班をここへ呼んでくれ。重傷者が多すぎる！』

チーム毎に、各フロアへ突入した武装機動隊員から、到着の知らせが続々と入って来た。

『こちら八班。二二階だ。こちらにも医療班の増援を頼む！』

武装機動隊が、各担当フロアに着いて、まず目にした物は、おびただしい量の血と人の手足のパーツだった。

どれも鋭利な刃物で切断されており、それらの手には拳銃が握り締められていた。

それらの状況から、動きを封じ、拳銃を撃たせまいとする意図が感じられる。

他にも、アキレス腱を切断された者、背骨や腰骨を砕かれた者、失血性によるショック症状を引き起こしている者までいる有様だ。

鉄組の構成員達は、《死》までには到らないものの、想像を超える程の痛みと苦しみの中でもがいていた。

まるで、この世の地獄を味わうかの様に…。

この余りにも凄惨な現場を目にした隊員の中には、思わず口を押さえてしまう者さえいた。

武装機動隊の後に続いて来た茉里華は、そんな光景を横目に、更に上階を目指した。

医療班の増援については、予め美里亜が茉里華に増援要請を促していた為、迅速な対応が出来た。

『茉里華姉様、現在、総介さんは三五階をクリアしました。こちらにも早く医療班を急行させて下さい！』

美里亜は、三五階の大会議場の惨状を茉里華に伝えた。

「分かっている。今、エレベーターの復旧作業中だ。作業終了次第、現場へ急行させる！それより、涼音はどうだ？」

美里亜は、四階《超VIPルーム》の映像を確認した。

『大丈夫です。気を失っているだけで、特に外傷は見当たりませんが、お相手の方が…』

国松は、総介による階下からの警告射撃の恐怖からか、既に精神が

崩壊していた。

(総介の奴、余計な仕事を増やしおって…)

かつて、《デリター》として殺戮の限りを尽くしてきた総介にしてみれば、《半殺し状態》とは言え、社会復帰としては目覚ましい進歩であると言えよう。

相手にとっては、《死》よりも辛い結果となってしまうが…。

『こちら一 班。二六階にて《K - t e a m》の一人、ふじたはじめ藤田元を確保。更に、隠し部屋を発見。中には女性の死体が…』

茉里華の元に続々と報告が入って来る。

・
・
・
・

「社長、屋上のヘリポートにヘリを用意致しました。私の部下の操縦で羽田へ向かい、そのままチャーター機でお逃げ下さい」

海堂は、眞吾を国外へ逃がし、再起を図る為の段取りを組んでいたのである。

「海堂、俺の右腕としてお前も来い！」

海堂は、眞吾の言葉に対して暫く考えた後、こう言った。

「私は《けじめ》を着ける為に残ります。六年前の自分に対する《けじめ》を！」

海堂は六年前、《カマエル》と呼ばれた少年を目の当たりにしながらも、その恐怖で足が竦み、手が震え、何も出来なかった事をずっと後悔していたのである。

そして、これから対峙するであろう男を倒す事こそが、エクスレィをはじめとする死んでいった《非政府軍》の仲間達への最高の手向けになるのだと信じている。

「先に行って、待つてるぞ」

真吾は海堂の肩を掴んでそう言うと、屋上への階段を上って行った。

その姿を見送った海堂は、背中に括り付けた日本刀を鞘ごと引き抜くと、階段を阻む様に座り込んだ。

・
・
・
・

四階《超VIPルーム》では、総介が撃ったハンドレールガンの弾丸に目が眩み、ベッドの上で気を失っていた涼音が、意識を取り戻した。

(…あれ、私…どうしたのかな?…たしか、銃で脅されて、口を開

けたら光が…)

涼音は、気を失う以前の記憶を徐々に取り戻していた。

(…まだ、目がチカチカする。…誰か、…居るの?)

涼音は瞬きを繰り返しながら、ぼやけた視界の中の人影に、少しずつ焦点を合わせていった。

「…!」

「遅くなって済みません。助けに来ましたよ、涼音さん」

涼音の前には、総介がいつもの笑顔で立っていたのである。

「何で…」

「はい？」

「何で、もっと早く来ないのよーっ!」

大きな瞳を涙で滲ませた涼音は、開けた胸を露にしたまま、総介に飛び付いた。

「総介総介総介総介総介総介総介総介総介総介ーっ!」

涼音は、総介の胸を強く抱き締め、総介の名を連呼し続けた。そして…

「涼音さ…むぐ…!?!?」

何と、勢い余った涼音は、総介の唇にキスをしてしまったのだ!

「コラッ、お前達!何をしている!?!?」

部屋の入口に茉里華が、仁王立ちでこちらを見ていた。

二人は咄嗟に離れたが、その様子はしっかりと見られていた。

気が気ではないのは、総介の方だ。

未成年で、しかも半裸状態の涼音と不可抗力とはいえ、キスをしている現場を茉里華に目撃されたのだから、後で大目玉を食らう事は必至だ。

「涼音、無事だったか?」

茉里華は涼音の顔を撫で回し、傷の有無を確認した。

一足遅れて、医療班が駆け付けた。

「それと、アイツも頼む」

茉里華は部屋の隅で独り怯えた様子の国松を指差し、彼の手当てをも命じた。

(《日本経済界の首領》と呼ばれた男も、こうなってしまうと、お終いだな…)

茉里華は、涼音と国松の手当てを医療班に任せ、自分と総介は眞吾を追う為、復旧作業が終了したエレベーターに乗り込んだ。

そんな二人の姿を不安げな表情で涼音は見送った…。

・
・
・
・

二人はエレベーターで、一旦五階まで上り、そこから専用階段で屋上へ向かう事にした。

「…茉里華さん。先程のアレは、不可抗力というか、涼音さんが勢い余って…」

「そんな事は分かっている。…大体、お前は脇が甘いから、付け入られるのだ。しっかりしろ！」

茉里華は、ご機嫌ななめだ。

エレベーターは五階に到着し、ドアがゆっくりと開いた。

二人が立つ数十メートル先の階段では、海堂が日本刀を床に立てて座り込んでいた。

「…やっと来たか」

海堂は、ゆっくりと立ち上がり、右手に握った日本刀の鞘を抜いた。

《名刀・村正むらまは》。この青白く光る刀こそが、海堂の愛刀である。

「鉄組・破壊活動実行部隊《K・t e a m》リーダー・海堂勇。A
級犯罪者……」

茉里華は拳銃を構えながら、海堂に近付いて行った。

すると突然、海堂は村正を上段の構えから一気に振り下ろした！

その直後、茉里華は空気を斬り裂く程の衝撃波を一身に浴びた。

(な、何という鬪気……。この男、化け物か!?)

「用があるのは、後ろの男の方だ。女は失せる!」

(くっ……!)

茉里華は後退おとすりをすると、総介の肩に手を置いた。

「気を付ける。奴は、今までの連中とは格が違うぞ」

「はい、大丈夫ですよ」

総介は茉里華の手を握り、満面の笑みでそう答えた。

「茉里華さん。少し下がって下さい。すぐに終わりますから」

そう言うと総介は、両腰の円月輪に手を掛け、慎重に前へ出た。

「六年振りだな。プレトリア基地では世話になった。《殺戮の天使
カマエル》！」

茉里華は、海堂の言葉に一瞬反応したが、総介は眉一つとして動か
す事はなかった。

「いいえ、三日振りです。あなたが、聖理奈さんを車から蹴落とし、
彼女に大怪我を負わせてから、三日が経ちました」

「…そうかい？」

海堂は村正を上段に構え、気を集中させた。

「償っていただきます！」

その瞬間、総介は目にも止まらぬ素早さで飛び出した！

海堂も総介のスピードに合わせて、村正を一気に振り下ろした！

総介は、その一太刀を紙一重で躲し、海堂の懐へ飛び込んだ！

「殺とったあ！」

海堂は、それを待っていたかのように、返しの二太刀目を総介の首に
目掛けて振り上げた！

海堂は、勝利を確信した！

しかし、振り上げた筈の村正が無い。それどころか、両腕すら見当たらない。

何と総介は、海堂が二太刀目を振り上げる寸前に彼の両腕を切り落としていたのだ。

「…俺の完敗だ」

海堂は、両腕から鮮血を吹き出しながら膝を落とし、自らの首を差し出した。

「…くれてやる」

そんな海堂を尻目に、総介は屋上への階段を上り始めた。

「何故、殺らない？あの日、お前は何百人もの人間の命をその手で奪ったではないか！何故だ！？」

総介は階段の途中で立ち止まり、後ろを振り返った。

「…もう、人を殺すのは飽きました」

それだけ言うと、総介は再び階段を駆け上って行った。

海堂と茉里華は、今の総介の言葉に対し、何故か納得してしまった。

(確かに、あんな台詞は奴にしか言えんな…)

「神崎だ。大至急、医療スタッフを五階へ上げる。両腕切断の重傷者だ。一刻を争う！」

茉里華が海堂の横を通り過ぎる際、海堂は口を開いた。

「神崎茉里華といったな。社長は、お前を許さないだろう。せいぜい、気を付ける事だ…」

「…肝に命じておこう」

そう言って、茉里華は総介の後を追った…。

【第一七話了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1930x/>

スイート・スイーパー

2011年10月21日11時01分発行